

教育論考

～新・教育協働への道～

(総集版)

Part 1

教育協働研究所

～岳陽舎～

井 上 講 四

2023年8月

※本「新・教育協働への道（総集版）Part 1」は、令和3年4月から書き始めた「新・教育協働への道」（1～10）を、一部修正の上、総集したものです。改めて、よろしくご笑覧下さい。

※連絡先

ホームページの URL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒gakuyou17@outlook.jp

目 次

- 1 再び歩み始める「教育協働への道」！緩やかに、それ故に、確かな足取りで?! 1
- 2 改めて、「教育」というものをどう捉えたらよいのか?! 6
- 3 最後は「人」！だけど、その人（達）は、ばらばらにいる?!何とかならないか?!11
- 4 最後は「人」！そうは言っても、「その人の人生」までは踏み込めない?!が、…16
- 5 名を棄て、実を取った？「社会教育主事（社会教育士）」養成?!本当に、そうか?!21
- 6 見えているか？「コミュニティスクール」のその先?!ある意味、最後の主張?!26
- 7 これからの「教育協働セミナー」は?!何が可能で、そして、意義があるのか?!31
- 8 最後のあがき？否、新たな可能性の追求？「教育協働セミナー」の次なる形は?!36
- 9 驚愕?!事実（先進事例）は、ここまで来ている?!ただ、惜しむらくは…??41
- 10 心配はない?!心ある人達は、そこそこにいる?!思いが、事態を打開させていく?!46

1 再び歩み始める「教育協働への道」！緩やかに、それ故に、確かな足取りで?!

(1)やはり、歩みを終わらせるわけにはいかない?!そして、実は、それしかないのでもある?!

ついに、「その時」が来てしまった！過ぎてしまえば、何ということはないのであろうが、あと数日で「古希」を迎える私は、ここで、改めて、これからの人生（余生?）を、どのようにするかを決めなければならない！そして、それを決定づけるのが、ここでの論稿作成である?!

ただし、他に何の取柄もない私であるので（謙遜ではなく、事実である!）、こう思うしかないのであるが、やはり、これまでの歩みを終わらせるわけにはいかない?!そして、実は、それしかないのでもある?!ただ漫然と日々を送るだけ、そんなのは嫌だということでもある！

相変わらず、大仰なことを言うなと思われる向きもあるかもしれないが、本当に、そう思っているのである（それが、自らの自己確認?!格好良く言えば「存在証明」でもある?!）！

ということで、まさに今、「古希」という「その時」を迎えるに当たって、新たな「教育協働への道」を歩み始めようとしている私であるが、しかしながら、不安も、当然ある！その一番は、そこで見出すテーマの意義、そのテーマへの接近努力（考察や情報収集）に、これからの自分が、どれほどの意欲（パッション?）を注ぎ込めるのかということであるが、他方で、目や足腰の劣化は、さらに進んでいる（長期に亘るコロナ禍が、それに拍車をかけている!）！

これが、この「古希」の頃の老いというものでもあろうが（ある種の自業自得でもあるが?）、端的に、パソコンづけの毎日は、本当に辛くなるばかりなのである！したがって、多少？弱気となるが、歩は緩やかとしたい！否、そうせざるを得ない?!だが、そうであればこそ、せめて確かな足取りで歩みたい！そんな思いなのでもある?!いずれにしても、果たして、どうなるのかではある?!

さて、そんな中、今、改めて思うことは、これまで「教育協働への道」と名付けて、その時々思いの丈を心ある人達に投げかけ、一方でまた、それを論稿として書き綴ってきたわけであるが、冷静に捉えると、それは、あくまでも、その時々に出くわした人との出会い・再会、そして出来事にかこつけた、私の想いの吐露、ある意味では「回顧」、そしてまた、その「備忘」のようなものがほとんどであった?!

言い換えれば、そこに、新たな情報や展開の肉付けによる、より有用な状況受け止め、論理展開があったわけではないということである?!さらに言えば、私の方からの、一方的な喋りに終始していたのではないかということである?!つまり、私のための論考（郷愁?）であったということである（それが、「現役

を退く」ということでもあろう?)?!

とは言え、今更、教科書みたいなものは書きたくないし(書けもしないが!)、そもそも、そうしたものは、今の私の眼中には、まったくない(誤解されては困るが、教科書が不要だということでは決してない!)!要は、この「新・教育協働への道」では(も?)、新たな情報提供あるいは理論構築というよりは、語ってきた「教育協働」の意味や大切さに共鳴/共感し、その下で、自らの実践を行おうとしている人達への、細やかではあるが、さらなるエールを送りたいということである!

ただし、そのエールが、それぞれのみなさん達の望ましい現実には、いかにどの貢献が出来るかは??である!今までもそうであったが、これからも、聞いてくれる人、見てくれる人がいる限り、続けていく!それしかない!そういうことでもあるわけである!

(2)驚異的な動き?!国立大学に、こんな「附属小学校」が出てくるとは?!

そこで、早速であるが、今、私の頭の中にあるのは、先月のセミナー(第34回教育協働セミナー)で知った、国立大学の附属学校(H教育大学附属小学校)のCS化のことである!まさに、こんな時代だからなのではあろうが(全国的なCS化の進行!)、少なくともこれまでは、あの、地域とは最も疎遠であった?国立大学の附属学校が、他ならぬ、その地域との連携・協働による学校のあり方を追求し始めているとは!

とにかく、そんなことは、これまでは想像も出来なかったことであるので、全くもっての驚きであり、まさか、こんな時代が来ようとはという感慨と、是非成功して欲しいという思いが、半ば渾然一体としながらの情報入手であったということである(なお、私立のそれは、ここでは論外である!)?!

ちなみに、同大学自体も、とてもユニークな教育組織・授業運営を展開しており(先程、同大学のHPを見たが、ただただ圧倒されるのみである!)、とりわけ、その「教職大学院(専門職学位課程:教育実践高度化専攻)では、他の大学(院)の追随を、まったく許さないようなしくみやカリキュラムが準備されている(オンライン使用はもちろんであるが、担当教員の現地出張授業も、個別に、しかも正規に行われている!)?!

どうして、このような大学(院)があるのか?誰が、このような大学(院)を実現させたのか?今更ながら、驚嘆と羨ましさが増すばかりである!繰り返しの愚痴?となるが、某国立大学の元教育学部長としては、これほどの衝撃はない!

とは言え、その中で、改めて私が特筆したいのは、これまで何度か紹介してきた「教育政策リーダーコース」のことであることは言うまでもない!つまり、そのコース目的には、「将来の『教育長』や現在の教育政策リーダー、教育行政をマネジメントされる方に必要な変革型の実践的応用力を育成する」と

あるが、実は、件の附属学校長には、そのコースの1期生が登用されているのである！

何という成果？であろうか！まさに、こうした教育政策／教育行政の専門家養成が必要であり、それがなければ、各地の教育界（もちろん、社会教育も含めて！）の混迷は防げないし、ましてや、明るい未来は描けない?!そのように思ってきた私ではあるが、この、大学（院）と附属学校のタッグが秘めている意義や可能性を、改めて知らされているのでもある！

ただし、余計なことであるが、ただそれだけであつたら、そうした動きを、私は、そんなに評価はしなかった？あるいは、好感をもたなかったかもしれない（ある意味、悔しくもあるから？）?!すなわち、現実には、そうした目的に呼応している人々が、全国に多数いるということ（沖縄も多い！）、そして、その顔ぶれもさることながら、その人達の思いや行動力（ネットワーク力、団結力も含めて！）が、とても凄いということである！

実際に面識がある人は、その内の一部ではあるが（しかも、多くはネット上での！）、そういう人達を、肌で感じられる！目の前で見る事が出来ている！そういうことである！これは、まったくの理屈抜きである！

だが、改めて、もし、国立大学の附属学校のCS化が必要だということになれば、そうした大学（院）の状況とは別に、その附属学校（幼稚園／高等学校等を含む）の設置目的・役割に、そのことが明確に示されなければいけない！

つまり、「大学の学部・大学院や地域と連携し、教員の養成と研修、学校教育の実践研究による指導法の開発など、日本の公教育の根幹を支え、教育水準の向上を図ることを目的として設置されている、教育実習等を行う教員養成の場として、また先進的な教育の在り方を模索する実験校としての使命を持つ附属学校」の位置づけや研究テーマのあり方が、改めて問われてくるということである！

(3) 目指せ！学校からの「教育協働プロモーター」の養成、そして、効果的配置！

翻って、そのH教育大学附属小学校のCS化の取り組みは、これまでの教員養成や教員の現職研修（教員の派遣）の中に、「学校と地域の協働による学校／学級経営、そして授業実践」というテーマ（課題）を、大きく、そして、正式に採り入れようとしていることは間違いない?!

私自身としては、そのチャレンジの意義と可能性を大いに吹聴？したいのであるが、まずは、こうした取り組みを必要だとする学校教育関係者が、他ならぬ「教員養成系大学（院）」及び、その「附属学校」から現れ出していることに（社会教育側からではないということ！）、驚きと称賛の声を挙げたい！

具体的には、当該圏域の「公立学校（直接的には義務教育諸学校）」のモデルとしての新しい形を提示するということであろうが（「働き方改革」も、同時に

提唱されているようである！)、それは、「附属学校改革」ではあるが、その究極にあるのは、まさに一般の「(公立) 学校改革」でもあるわけである?!つまり、「学校とは何か?」、そして、それは、「地域の中に、どのようにあればよいのか?」という、本源的な問いに関わるものなのでもある!

だから、それはまた、「学社融合」→「教育協働」への視座となり(「地域教育経営」→「ひとづくりとまちづくりの循環づくり」)、私に言わせれば、それはまた、かつて唱導した「教育協働プロモーター」の養成、そして、その効果的配置にもつながっていく動きと捉えることができるのである?!

これまでは、公立学校では出来ないこと、そして、それが、公立学校のため(その役に立つ)、あるいは、そのモデル?としての役割として、各種の取り組み(教育課程/授業研究等)を実験的・先駆的に行う、それが使命であるということであったが、それが、実態としては出来ない?!

否、それよりは、むしろ、それを逆手に取って(公立学校には、所詮期待できないから?)、それとは違った目的(進学実績づくりも含めて?ただし、それは、それぞれの大学の設置状況によって異なってはくるが?)を追求していた感もある附属学校であるが、今回のそれを、単なるブーム?の延長というように受け止めている向きもあるかもしれないが、取りようによっては、やっと、本来の姿が求められてきたということでもある?!

進学や就職、その先にある有利な人生を求めての「学歴社会」の出現は、ある意味必然ではあったが、もうそろそろ、その負の遺産の相続は放棄して、新たな財産の蓄積にシフトしていくべきなのである!そこでは、まさに、何を学んだのか、何をしたいと思うようになったのか、その「学習歴」が問われるべきなのであり、しかもそれは、何も学校だけのものではなく(時間的にも、場所的にも!)、生涯に亘って続けられるものなのである!

問題は、その基礎となる学校での学び(人間関係も含めて!)を、よりよいものにしていくためには、それを促進させる「教育協働プロモーション」が重要なのであり、それを実現、遂行していく人々「促進者/プロモーター」が必要なのである!

そこに期待されるのが、今回のH教育大学の附属学校の動きなのであるが、彼らは(教員だけでなく、学生達も!)、各地の教員としては当然であるが、そのうちの一部(実数としては多い!)は、教育政策/教育行政の専門家として、将来大いに羽ばたいていく存在なのである?!

肝心なのは、一人前の人間として、子ども達がどのように育つのかであり、彼らが、地域や国をどのように受け止め(愛し?)、その一員として、どのように生きていくのかである!現在、ある意味不幸な?光景(他国への侵略や人権・人命の軽視等!)が面前に広がってもいるが、とにかく、「教育」は、そうした現実の中で、たとえそれが、究極の理想ではあっても(他方で、苦しみな

がらもという意味でもある?)、みんなが協力していくということが重要なのである!

この看板(覚悟)を打ち捨てるなら、それは、最早教育ではない!だから、例の「働き方改革」は、学校(教員)の場合には、過重な業務の軽減ということではあるが、ただそこでは、減らせばよいということでは決してないのである!

(つづく)

2 改めて、「教育」というものをどう捉えたらよいのか?!

(1)「教育」は無力か? そうとも言えるし、そうでないとも言える?! 昨今の、悩ましい状況に想う?!

先号(1)では、H教育大学の附属小学校の動きと、それに関わるCS・地域学校協働活動という流れをどう受け止めればよいのか? そして、そこから、そもそも、「学校」というものの存在をどう考えればよいのか? そこに、かの「生涯教育(学習)」の理念を、どう具現化すればよいのか? さらには、そこにおける、これまで提唱してきた「教育協働」に向けたプロモーション/プロモーターの意義・必要性等について論じたつもりである?!

最後のプロモーション/プロモーターについては、少々我田引水的是であったが、それがなければ、事態は、なかなか進展しないし、多くの人のチャレンジや苦労?も、ほとんど報われないものとなるのではないか(頑張っている人達には大変申し訳ないし、失礼でもあるが、少なくとも今の私には、そのように思えるのである?)?!

ということで、今更ここで言うのも、かなり面映ゆくはあるが、我々の人間社会には、どんな形にしろ、「教育」という営みがあり、それへの「絶対的な信頼と揺るぎない信念」が存在している! そして、その「信頼」と「信念」は、洋の東西を問わず、その時代時代にあって、そこに生きた幾多の先人達がつくりあげてきた財産でもある(はずである?ただし、私は、そのごくごく一部のことしか、直接は知らないわけだが?)!

だが、今、その「教育」への「絶対的な信頼と揺るぎない信念」に、かなりの揺さぶり、否、ひび割れが生じているようにも思われる?! と言うのも、最近の世界情勢、とりわけ、某国の、その隣国への武力侵攻(侵略?)のことが頭から離れないわけであるが(何で、そこまでやるのか?出来るのか?)、特に、ここでの文脈からすれば、そこで頻繁に耳にする「プロパガンダ(主義・思想の政治的喧伝)」とか、「フェイク(嘘・捏造)」とかという言葉(現象)が、大いに気になるところなのである!

すなわち、そこには、「教育」ということと、ある部分ではリンクしている? 「インドクトリネーション(教化)」とか、あるいは「マインドコントロール」「ミスリード」のような要素(目的)があり(「教育」という営みは、現実態としては、往々にして、それらを内包している?)、それが、他国(者)への武力侵攻(侵略)の大義名分づくりと、分かち難く結びついているからである(事実、当国では、そのことを支持するという人が飛躍的に増大している!また、直接的な教育プログラムも、学校に導入されているようである?)!

しかるに、有史以来、様々な経験や情報を共有しているはずの、この人間社会、この21世紀にあって(もちろん、戦争を始めとする幾多の痛みや困難を経て!)、そんな、人間(人類)の大切な知や思いを愚弄するプロパガンダやフェイク等

が通用するなんて、あり得るのであろうか?!それほど人間(人類)は、無知で、愚かなのであろうか?

そんな思いを巡らすことが多くなっている私であるが(そんなことしかしていない、否、出来ない自分自身が、歯痒くて、情けなくもあるが!),一方では、そこには、まさしく「教育」がもっている力、もっと突っ込んで言えば、伝えよう、やりようによっては、悪や不正にも、一様に導いていくことのできる「怖さ(負の力)」があることを、まざまざと見せつけられてもいるわけである?!

ただし、このことは、冷静に捉えれば、何も最近の話ばかりではなく、言うなれば、有史以来絶えず続けられてきたものであるとも言え、実際には、そのことの方が、より多くの現実をつくりあげてきたとも言えるであろう(戦争や差別、人権侵害等は、ある意味常にある?)?!であれば、標記したように、「教育」は無力か?そうとも言えるし、そうでないとも言える?!

ならば、どうすればよいのか?あるいは、そうであったなら、諦めるのか?ということにもなるが、ここでは、改めて、私なりの想いを述べておきたいと思う次第である!だが、この任を、こんな私(今は何もしていない?何もできない?)が担ってよいのかという、自問(愚問?)へのジレンマ(恥ずかしさ?)が少なからずあることは、明確に名状しておきたい!

(2)「教え育てること」は、絶対に必要!だが、「落とし穴?」もある?!そのことを忘れてはいけない?!

さて、今回、そういうこともあって、昔覚えていた?、「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という、「ユネスコ憲章(前文)」を取り出してみた(情けない話であるが、当初、何の前文なのかを失念していた私である!)!まさに、その通りであろう!これが、この人間社会、この21(←20)世紀の大きな経験でもあり、教訓でもあるはずである!

ただ、それは、あくまでも、かの第2次世界大戦直後の話である!あれから、何年が過ぎているのであろうか?それがまた(まだ?)、今現在にも通用しているのである!「人の心と一体の」教育の営み?!この間、人間社会は、何をやってきたのか?その教育の力(成果)とは、一体、何だったのであろうか?そんなことさえ、思わせるわけである!

いずれにしても、その「とりで」は、果たして、いかにして築かれるのか?それは、まさに「教育」の力によってであることは間違いない!先に生きた(苦悩した?)人間が、次に生きる(苦悩するかもしれない?)人間に、その「とりで」の大切さを、根気よく、「教え育てる」他ないのである!しかし、その「教育」の力は、いかようにも発動され得るのである!それがまた、人間の歴史でもあるのである!

要は、「教え育てること」は絶対に必要であるが、そこには「落とし穴?」

もある?!また、その連続でもあった?!だから、そのことを、決して忘れてはいけない!そういうことでもあるが、では、改めて、そのことは、どのようにして実現されるのであろうか?その実現は、絶対に不可能であるという人もいるであろうが、やはり、その思いや努力は、何がなんでも維持し続けていかなければならない!否、そう思えることが重要なのである!

ということで、人間社会は、改めて、これから、このことをどう克服していけばよいのか?その「教育のもつ怖さ」を、どうコントロールすればよいのか?そこが、問われるということになるということであるが、その答えは、ある意味では簡単である?!

何故なら、それは、我々の眼前にある、まさに日常的な、各々の生活の中にあるからである?!そこには、善悪、否、すべての価値が横たわっているのである!ただ、残念なことに、多くの表面的な日常には、そうした「とりで」を築く機会や関係がない、見えない(無視、いじめ、差別、孤立?)?!そして、今回のような、大国?による、一方的(身勝手)な攻撃(侵略)!どこに、それがあるといえるのか?!

とは言え、他方では(見ようによっては?)、人の温かさ、優しさ、そして、一致協力して、地域復興や地域再生に向けて汗水を流す人達の姿や思い、それらは、確実に、その「とりで」となっていたり、それに向けての萌芽となっていたりしているのも事実である(それは、直接的な教育プログラムではないが、むしろ、こちらの方が圧倒的に多い!)!

そこで、人々は(もちろん子どもも!)多くのことを見聞き、感じ、考え、そして、協力して行動している!よく、「地域コミュニティ」とか言われるが、そこには、大きな「教える力」が埋め込まれているとも言えるのである!
(3)学校に、「地域学校協働センター」が必要なわけ?!それは、経験し、苦悩した人達だからこそ分かる?!

もちろん、それは、ある意味では、そうせざるを得なかった!そうしなければ、そこに住むみんなが、生きていけなかったからではあるが(往古の地域は、まさにそうであった!）、その大切さは、本当は、今なお(さらには、これからも!)変わらないわけであるが、往々にして(便利さ故に?)、忘れ去られているだけなのである?!

そんな中、今回、こうしたことを考えさせる、もう一つの情報を得た!それは、今年度もまた購読を続け始めた『(大判)社会教育』の5月号の記事、「地域学校協働センターを核とした持続的な地域づくり～3・11から11年目を迎えた原発事故被災地 檜葉町の教育による地域再生の試み～」(執筆者:同町教育委員会指導主事/地域学校協働センター長のSさん)である!

詳しい紹介はできないが、かの東日本大震災によって、町の存続自体が危ぶまれていた同町(正確には、同町の小学校)に、「地域学校協働センター」が設

置され（教育委員会の所管）、記事の表題からも明らかなように、「持続的な地域づくり」、「教育による地域再生の試み」がなされ始めているのである！

もちろん、CSや地域学校協働本部事業の立ち上げは、全国的に進んでいるわけであるが（そのどちらかしかやっていない自治体も多いが！前者が33.3%、後者が54.7%。両者の設置は24.0%。令和3年5月現在）、ここでは、CSと地域学校協働本部事業の同時推進、しかも、それを、小学校に設置する「地域学校協働センター」によって行うということ、

そして、それが、単に（小）学校、子ども達への支援ということではなく、「全町避難を余儀なくされた原発事故被災地においては、帰還後の地域コミュニティの再生は喫緊の課題であり、…地域コミュニティの崩壊から復興・再生に至る中での教育の役割や可能性（を考えて）…この度、

…多くの方々の知を結集し、新たなアクションとして、…『地域学校協働センター』を設立…被災地ゆえの実践ではあるが、地域コミュニティの再生から、持続的な発展という次のステージを見据えた町の取組…」となったとある！

「多様な地域住民の協働活動や地域活動に対するニーズが、地域や保護者自身が主体となって、そのまま具現化できる。…地域の人・モノ・コトという『材』を、学校教育と社会教育の多様な機会において活用可能となるよう整備し、学校のニーズに基づく地域をテーマとした教育活動も容易に展開できるようにした。

…協働センターが協働活動をはじめとするあらゆる地域活動の基盤としてのプラットフォームを提供することによって、教育参画による地域における人間関係の形成、そして地域コミュニティの再生を図った。」ということなのである！

震災&原発被害という未曾有の労苦を被った、言い換えれば、それで苦悩した人達、自治体だからこそ分かる取り組みであり、そのしくみづくりであるということである?!

最早、これ以上の説明は不要であろうが、ここには、これからの地域コミュニティ（市町村、県、引いては、国・世界？）のあり方が示唆されているわけであるが（決して誇張ではない!）、まさに、「人づくり（教育）」と「まち／地域（国？）づくり」は循環（往還）しているのである！

そこから得られる成果、そして、価値の創造／共有は、まさに、我々人間社会（人類）の宝なのである！余計なことかもしれないが、そうした成果や価値（宝）、そして、人間の命を、いとも簡単に奪い去ることの出来る人間は、そうした、地域コミュニティの良さ・有難さが分からない人間なのかもしれない（あるいは、不幸にも知らなかった？しかし、一応はエリートとされていた?）?!

最後になるが、そうは言っても、人間は変わることができる（しかし、悪くも?）!そこに必要なのが、「知」であり、「智」である?!かの、「知の巨人」

と言われた立花隆氏（昨年4月逝去）は、「人間とは何か」を問い続けたということであるが、彼は、「いのち連環体⇔いのち連続体」（「総合知」というものがあり、人間の知（歴史）は、それによってつくられていくとじていたらしい?!
まさしく、そうであって欲しい！

（つづく）

3 最後は「人」！だけど、その人（達）は、ばらばらにいますか?!何とかならないか?!

(1)新たにスタートした、玉城青少年の家の主催事業！そこで出会った、凄い人物?!

先日、玉城青少年の家の主催事業が、新たにスタートした！それは、「オンライン事例発表セミナー～学びつながら地域づくりを考える～」という事業であるが、第1回目（6/4）は、「①～古写真デジタルアーカイブの活用と地域づくりにもたらす利益について～」ということで、自称？（資格かどうかは分からない？）デジタルアーカイブ・ディレクターのFという人の事例発表があった。

少しやんちゃな「いがぐりおじさん風」（40代半ば？）であったが、様々な情報に通じていて（いろんな世界を知っている？）、久しぶりに出会った実力者であった（話術も含めて!）?!私が現役の頃であったならば、大学の授業やゼミ活動等で、確実に、ゲスト出演してもらったであろう?!それくらい、インパクトのある人物であった！

それはともかく、今回は、今、彼が行っている「古写真デジタルアーカイブ」の事業（活動）内容の紹介であったが、改めて、その意義や可能性（地域づくりや教育への活用等）を感じさせてもらった！このデジタルアーカイブについては、名前くらいしか知らなかったが（私には、ほとんど無縁の世界だと思っていた？）、やはり、この機会がなかったならば、ほとんど、その意義や可能性について知ることはなかったであろう?!

昔の写真（動画、あるいは紙媒体も該当するらしい？）を掘り起こして（個人が有している、何気ない日常の写真を含めて!）、その折々の情景や社会背景が読み取れる?!もちろん、そこに映っている（登場している？）当事者達は、そういうところまでは頓着していない?!しかし、それが、いわゆる「故郷」の再発見にもつながるといえることである?!

私には、その修復（デジタル加工）技術／機材自体は、まったく分かる由もないが、こうした地道な活動（発見・発掘を含む）が、子ども達を含む、その地域の人達の、新たな人間関係づくりや、学校での「郷土学習」等に活用されれば、まさに「地域づくり（まちづくり）」と「教育（ひとづくり）」の往還（循環）に、大いに貢献することとなる?!

要は、ただ、ごく一部の人の郷愁や思い出話だけに留まらない、新たな地域づくりの局面、新たな地域づくりのツールともなるということである?!

ただし、それは、これまでのような「ゲストティーチャー」の招聘や「タウンウォッチング（街角散策）」の実施を否定するものではなく、むしろ、その双方を融合した、新たな「ふるさと学習プログラム」の一環として展開、活用されれば、さらに身近で、より実感性のあるものともなろう?!それが、魅力な

のでもある（自分達の「おじい／おばあ」の若かりし頃が見えるかもしれない?!）?!でも、そこに、それをお世話する（唱導する）人物が、一方で、絶対に必要である！単なる偶然では、長続きしないのである！

ということで、実は、私は、この論稿（事業の紹介?）の向こうで、かなりの無理（飛躍?）はあろうが（否、本当は、そうではない?）、ある意味、「(教育における) 知の連環体→連続体」を期待しているのかもしれない?!

それは、先号（2）で触れた（烏澁がましくも?）、かの立花隆氏の「知の連環体→連続体」のことであるが（尤も、それは、もちろん「教育における」という枕詞付きであるわけであるが!）、それは、何も、特定の研究者や専門家集団の中だけの話ではなく、まさに、今、そこに生きている、すべての人々の間で生じることであり、また、そのことが、非常に重要なことなのではないかと思うからである！

(2) そうした「凄い人物?」は、おそらく、どこにでもいる?! しかし、問題は、彼らの存在と活動の成果が、広く知られ、しかも、それが、面としての広がりを持っているかどうかである?!

ところで、かつて（今でも?）、よく「本物に出会うこと」、「実践を行っている人に直接話を聞くこと」が、子ども達に（否、大人達にも?）大いに感銘を与え、教育プログラムとしては、非常に有効なものを受け止められてきたように思うが（→「実物教授」あるいは「経験（体験）学習」）、実は、そこには、かの「知の連環体→連続体」の契機が、大いに宿しているのではないかとも思う次第なのである?!

そして、それが、何ということはない、「教育の三層構造的理解（FE/NFE/IFE+IL）」と、それに基づく「教育協働の必要性」ということにつながるわけであるが、その方法論が、ここに、いみじくも示されているのではないかということである?!

ただし、一方で、最早多くの「知の連環体→連続体」の契機は、日常生活の一部にはなく、だから、現在では、そうした「知の連環体→連続体」の契機を意図して、誰かが、人為的に（汗水垂らして?）発案、企画・実施しないといけないうことになっているわけであるが、なかなか、その「人」が見つけれられない? 続かない? いても、その「人」とコンタクトを取ることが出来ない? そういうことが、一方で、あるわけである?!

例えば、現在、様々なしくみづくり、取り組みが行われ始めているわけであるが（CSや地域学校協働本部事業等）、ある意味上辺だけの連携・協働に終始し、しかも、一部の人の関わりで、それが行われているようなところがあり、そこでの、重要な「人」との出会いも、必ずしもうまくいっていないように思える?

以前、「重要な or 意味ある他者（significant others）」の重要性について

述べたこともあるが、ある意味、それは、この「知の連環体→連続体」に大いに関わるものとも言えるかもしれない?!つまり、「それは、何なのか?」、あるいは「それは、何故なのか?」「どうしたらよいのか?」、そして、「(もっと)知りたい」etc.それが、人から人へと連鎖し、広がっていくということである?!

そこで、私が、今改めて、この「玉城青少年の家(沖縄じんぶん考房)」の主催事業に注目(期待)するのは、そうした、ばらばらにいる「凄い人物?」との出会いの場づくりであり、彼らが示す、その将来構想へのパワーの結集、そして、そのためのネットワークづくりなのである?!格好良く言えば、今流行の?「ブレイクスルー」への、新たな(最後の?)場(形)づくりと言えるであろう?!

繰り返し言っているが、「誰でもいい!どこでもいい!」、思いと力をもっている人や場があれば、まずは、それでよいのである!ただし、ここで、改めて私が言いたいことは、これまでも、そういう人や場はあったし、今でも、さらなる成果を挙げ、新たな脚光を浴びている人や場もある(最近では、例のコロナ禍によって、苦勞されているようではあるが?)?!そしてまた、ビジネス?として成功しているところも、多々ある?!

だが、いずれにしても、私が、欲張りなのかもしれないが、そして、余計なお節介かもしれないが、それらの、「面としての広がり」が見えないのである?!別な言い方をすれば、それぞれが、それぞれに評価され、その地域、その場所で脚光を浴びる存在になっていたとしても、そこで終わってしまっているのではないか?!

ただし、これについては、今セミナー後の「ゆんたく(おしゃべり)」において、彼らも意識しているらしく、もっと大きな「面としての広がり」を求めているということではあった?!しかし、やはり現実には厳しく?、なかなかそのようには動けないということでもあった!

(3)最後は「人」!だけど、その人(達)は、ばらばらにいる?!そこを何とかしなければいけないのである?!

そこでだが、みんながそのように思っているのならば、脈はある!望めば、実現するのではないか?!多少?自嘲とはなるが、「自由大学」と僭称し、そうした思いある人達の出会いの場、相互交流の場として、「教育協働セミナー」を立ち上げ、

そしてまた、今回のように、他の施設や事業と連動させて(そこから派生させて)、新たな「ネットワークづくり」や新規事業への働きかけを行ってきているわけであるが、もう既に、自らの必要性の下に、動いている人や場はあるわけである(ただし、私の思いや働きかけは、それ自体では、ほとんど必要とされていないということでもある?)?

とにかく、最後は「人」!と言うけれど、その人(達)は、実際には、ばら

ばらにいます?!そこを何とかしなければいけないのである?!!

ちなみに、こうした思いや働きかけについては、思い起こせば、私が琉球大学にお世話になった1990年から続いていると言え、そう言える?!もちろん、それは、その時々々のゼミ生や関係市町村（国社研や他県の人達、そして、県教委や学校関係者を含む!）のみなさんとの関係の中であるが、その都度、かなりの感触もあり、新たな動きへのお手伝いも、可能な限りしてきた（つもりである?）?!

だが、やはり、残念ながら、それらは、つながっていない?!自らの不徳の致すところと言え、それまでだが、面としての広がり、そして、それらの時系列的な発展の姿・形が見えない（出来ていない）のである?!

これについては、あまり吐露したくはないのであるが（愚痴と取られれば、恥ずかしいからでもあるが?）、人は、ある人の立場や力を利用して、自らの立場や業績?を作り出そうとする?!つまり、利用し、利用されるということであるが、私の場合も、少なからず、そうしたことがあったように思う?!

私が、いわゆる「いい人（都合のいい人?口は悪かったが?）」であったからでもあろうが、その人達には、自らの思い（計算?）と人生設計があったということである?!特に、現職教員の大学院受け入れでは、そうした要素が多分にあったように思う?!

もちろん、彼らに、恨み辛みなぞ毛頭ないが（本当である!）、私としては、彼らの大学院入学自体を歓迎したのではなく（多少、いい気になっていたのかもしれないが?）、そこからの飛躍、修了後の活躍、そして、何より、私の「地域教育経営→教育協働」理論の理解者／実践者として、彼らが羽ばたいてくれることを期待していたのである（そういう意味では、お互い様なのかもしれない?）!

いずれにしても、彼らは、ほとんどが、私から見れば、個々に活躍し（多くが、校長や行政職へ!ただし、一部、心を壊した?人もいた!結局は、助けられなかったわけだが、その人には、大変申し訳ないことをしたと、今でも後悔している!）、私が期待したような、彼らが中心となった「地域教育経営→教育協働」の人的ネットワークの形成は実現しなかった!

結果的に（ある意味、そう言わざるを得ない?）、そうなったのではあろうが、一人ひとり、そういうところまでは望んでいなかったものであり、自らの立場や業績づくりが、主たる目的であったということであろう?!ある意味、彼らの、その時の、一時的な居場所（避難場所?）を提供したということでもある?!

ということで、これ以上書くと、自分が惨めになるので、これ以上は書かないが、これが、多くの、地方の大学院レベルでの師弟?関係の実情なのかもしれない?!

しかし、それで、よいのである!淋しい（悔しい?）と言え、それまでで

あるが、今回の呼びかけは、まったく事情が異なる！他ならぬ、私の立場が違うのである！ない、あるいは弱いということであるが、だから、いくら私が、これまでの集大成と位置づけ、そして、おそらく最後のお手伝いとなろうと言っても、ほとんどの人には、そして、他ならぬ、以前の私の立場や力？を利用しようとした人にとっては、まったくの他人事なのである？！

もちろん、それでよいのである！「心ある人」、私が、そう呼び続ける人がいれば、それでよいのである（たとえ少なくとも！）！

（つづく）

4 最後は「人」！そうは言っても、「その人の人生」までは踏み込めない?!

(1)「相談役」と名乗ってはいるが、実際は、ほとんど役に立っていない、今の私?!これでいいのか?!

まず、あまりにも明瞭であるが、ここでの執筆が、大いに滞ってしまっている！書きたいことが、その後ないと言え、それまでだが、何かここでの、まさに差し迫った、書きたいという欲動が、少々減退しているということである?!そのことは、残念ながら認めなければならない?!

だが、やはり、その遠因はある?!あまりにも長引くコロナ過（それに付随した数々の失政?）、2月から始まった、某国の他国侵略（暴虐）、そして、度重なる自然災害（豪雨災害等）や信じられないような事件・事故への悲憤慷慨や憂鬱が、ある意味悠長な?「教育論」を書くことの虚しさ、書いていることへの不信、そうしたものを助長させ、それらが、夏の暑さと渾然一体となって、私の、論考への意欲を萎えさせているということである（否、ただの「加齢による怠け心」かもしれない?）?!

しかし、こんな私がどうであれ、世界、国、そして、周囲の人々の厳しい現実がそこにはあるのであり、そうした現実の中で、今いる一人ひとは、精一杯生きているのである！そして、そこでは、それぞれの喜怒哀楽が繰り返されているのでもある（他ならぬ、元首相の惨劇も、その一つであろう?）?!

とは言え、かの「無常」と言え、そうなのであろうが、今の私は、そうした、それぞれの生活（人生）を必死で生きているであろう、多くの友人、知人、卒業生達（もちろん、離れて住む娘や孫達も含めて!）の今、そして、これからを、半ば茫漠とした思いの中で思い遣ることしかできないでいる?!

それこそ、先号（3）で、再び、「心ある人達」へのエールを送ってみたわけであるが、悲しい、否、哀しい?かな、その「心ある人達」との直接の出会い・交流の機会が、めっきり少なくなっているということである?!

ということで、論考減退の直接の原因は、もちろん、この、今般のコロナ禍による行動機会の減少にあるということであるが、一方で、それを出来ない理由に挙げ、自ら努力していない自分がいるということである?!

そして、それが、今もなお、その相談役を名乗っている玉城青少年の家に対しても、おそらく、その最低限の役割しか果たしていないということである?!

たまにリクエストがあり、全体としての、彼らの仕事振りへのアドバイスや、個人的な人生相談?みたいなものも行ってはいるが（ほとんどが、電話やズームで!）、果たして、どのくらいの貢献をなして（喜ばれて?）いるのかどうか?!

要は、そのことも含めて、まさに最前線で働いている人達、とりわけ時代を創る若い世代の人達の課題や思いに、ほとんど応えていないということであるが、これが、現役を退いたものの宿命（哀れ?）とは言え、誠に悔しいということでもある?!

ただし、そうだとはいえ、こんなことばかりではないことも事実ではあるので（本当である！例えば、今現在、「古希」を迎えた高校時代の仲間との、月1回のズーム交流、そして、それを介した「こきこき通信」というミニコミ誌の発刊も行っている！）、「心ある人達」には、あらぬ心配はかけたくない！

だから、ここで、実際は、ほとんど役に立つことはできないであろうが、もう一度、思いも新たに、その「心ある人達」にエールを送ることにしたい！そう思っただけ、再開だということである！

ちなみに、今年も、現在、あの「夏の甲子園」が繰り広げられている！私も、かつて、花の？高校球児であったが（もちろん？甲子園へは行っていない！）、試合のことよりは、何故か、あの頃の、夏の暑さの皮膚感覚の方が、強く思い起こされる？！そして、テレビ越しに見る、体格的にも優れた、今の高校生達の姿が、ただただ眩しく感じられる！

とにかく、遠い？昔の感傷とは言え、時代は変わったものである！そんなことを思いながら、以下、論を進めていくこととしたい！

(2) 最後は「人」！そうは言っても、「その人の人生」までは踏み込めない？！

と、その前に、最近、つくづく思っていることがある！しかし、それは、ある意味「口に出して、言っただけはいいこと！」でもある？！それでもなお、ここでは、一度書いておきたいのである！

今の、自分の立ち位置（境遇？）も顧みず、そんなことを言うのも憚れるが（相変わらずの、上から目線ということである？）、どうしても、ここに、そのことを入れ込んでおきたいのである！

それは、「どんな仕事、どんな活動においても、最後は『人』！そうなのではあるが、そうは言っても、『その人の人生』までは踏み込めない？！」、否、「踏み込んではいけない？！」、そういうことである？！

実は、このようなことは、まさに第一線を退いた（否、否が応でも退かなければならなかった？）人間の無力感、諦観？あるいは、ある意味での敗北感、はたまた内なる自己肯定感？を示すものかもしれないが、改めて、そのように思うのである！

どんなに、その仕事・活動に、そうした行動や考え方（この場合は、「地域教育経営→地域学校協働活動→教育協働」）が必要だと言っても、多くの人（特に、結婚や子育て期にある人達）は、自らの生活状況（連れ合いや家族のこと等）を変えて、端的に言えば「犠牲にしてまで」（本当は、そうではないと思いたいのだが？）、そのようなことはしたくないと思うのである？！

さらには、どんな行動や考え方をしても、それだけでは、自らへの評価に繋がらないのであれば（給料とか職階のアップとかである！）、多くの場合は、いわゆる「そこそこ」の仕事、活動に終始するであろう（それが、人情というものである？）？！

与えられた業務（ノルマ）の範囲内ということであるが（もちろん、それさえも、場合によっては、かなりの負担や責任が伴うが！）、「それは、それでよい！」ということになる?!ある意味、それで、精一杯だということでもある?!

尤も、別な価値観、考え方、あるいは仲間内で、自らを律し、その限りにおける仕事や活動を行っている人も、一方で、多々いるわけであるので（「政治的なもの」はともかく、近年では、そうした傾向が、さらに強まっている?）、まさしく、「最後は『人』!」そう言い続けても、『その人の人生』までは踏み込めない?!」ということが、さらに強固なものとなるわけである?!

ましてや、「誰の仕事、行動が良いのか」なんて、誰にも言えないし（分かることは分かるが!）、言ったところで、ただそれだけでは、事態は変わらない?!

しかも、実際は、そうした人達（の多く）の、一方では「あからさまの」、他方では「隠微な」戦い?もあるわけであるので（それによって、他ならぬ、自らの人生を壊されたり、居場所/立場を篡奪されたりする人もいる?）、「最後は人!」とか、「その人の人生までは踏み込めない!」とかというような言質は、それこそ「綺麗ごと（善人ぶった言い振り?）」のような気もする?!

大切なのは、その人が、何が大切だと思ひ、その仕事や活動を行っているのかであり、それを決めるのは、他ならぬ「その人自身」なのだから（考えてみれば、至極当然であるが?）!

(3) そんな中、嬉しい、そして頼もしい「心ある人」が、今また（まだ?）、私の目の前にいる!!

とまあ、こんなことを思いながら、この間の日々を送っていたわけでもあるが、そんな中、嬉しい、そして頼もしい「心ある人」が、今また（まだ?）、私の目の前にいる!!是非、今回は、その人のことを取り上げたい!

正直、まさに、その思いこそが、新たな、ここでの私の論考を誘ったのである!こんな人がいるのである!そして、こんな素敵の人が、今の私の思いに答えてくれているのである!

改めてであるが、その人は、K県のNさんという人である（確か、以前にも紹介したことがある?否、絶対にした!）!近々行方、第39回「教育協働セミナー」の話題提供者である!

事前に送られてきた「発表用資料（PP）」は、上記のことを余すことなく示す証拠であるが（質量ともに、驚きのものである!ここでは、具体的に紹介できないのが残念である!）、その別途作成のレジュメには、彼女の想いと活動の大枠が、改めて示されている。繰り返しになるが、何という人（私の言う「心ある人」）なのであろうか!

しかるに、今回の話題提供（発表）のタイトルは、「K市型地域共生社会の実現に向けた社会教育士の役割と課題～学校と地域と行政との協働による『プラットフォーム』化～」とある!

今年、教職（中学校）を退かれて、新たに、一般社団法人「学校地域協働活動・家庭教育支援・世代間交流センター『もうひとつの大きな家族』」を立ち上げられ、仲間のみなさんと共に、鋭意地域活動（学校地域協働活動・家庭教育支援・世代間交流）を始められているわけである！

その「学校地域協働活動」「家庭教育支援」「世代間交流」という三つの分野は、例えば行政的には、一般的に、それぞれ違った対応がなされるわけであるが、その三つは、決して別々のものではなく、互いに緊密に関わりあっていく必要があるという実感（信念？）が、そこにはあるということである？！

ただし、「社会教育士の役割と課題」という位置づけは、半分は、自らが、一昨年度？取得された「社会教育主事資格」の活用への意欲を示されていると思われるが、一方では、「社会教育主事」や「社会教育士」への期待とエールを送り続けている、私の「教育協働」への呼びかけに、意図的に心を寄せていただいているものとも受け止められる！まさに、私の言う「心ある人」そのものなのである！

とにかく、彼女（達）が目指しているものは、「地域共生社会の実現」である？！教育や福祉等、様々な分野での仕事、活動が、どこの地域でも展開されているわけであるが、それらは、決して別々のものではなく、否、別々に行われるべきものではなく、互いが協力し合いながら、問題・課題解決に当たる必要があるということである（だから、近年では、「協働」という概念が多用されるのである！）！

そして、その共有の目標が、まさに「地域共生社会の実現」ということなのである？！

でも、それだけでは、有効な動きやしくみが見えてこない？！誰か（どこか）が、意図的、積極的に仕掛け、呼びかけなければ、現状は、なかなか打破されないのである！

そこに期待されるのが、そうした任務（横串を入れること？）を本来的に担う「社会教育主事」なのであるが、その任用・活動状況が今一つの実態があり（否、かなり悪化している？）、その一方で、その社会教育主事の資格を有し、誰（どこで）でも、その資格の有用性（と言うよりは、強き思い？）が発揮できる、新たな「社会教育士」の活躍が期待されるということでもある（もちろん、現実には厳しいものだが！）！

そこで、提出されているのが、①求める制度の主旨（社会教育士にどういう意味合いがあるのか／認知度の低さ／拡がるか否かを検証する／環境がどうあれば活かせるのか）②社会教育士としての活動（事例紹介：「ほっと笑」の活動・フリーで地域で活動している／教育協働セミナー参加者の、社会教育士としてのかかわり・可能性）③社会教育士の可能性（学びの要素を意図的・計画的にコーディネートができる／俯瞰的視野／より自覚的に自分自身で値づける座標の獲得／称号を

得る前と後の行動変容) ④課題 (学校の中でもやっていたが、場をつくったことによって外部資源とつながりやすくなった／元教員という経験を役立てる／強みは何か／社会に開かれた教育課程／コミュニティスクールとの関係) という事なのである！改めて、当日 (8/20) が楽しみである！

(つづく)

5 名を棄て、実を取った？「社会教育主事（社会教育士）」養成?!本当に、そうか?!

(1)まず、「名を棄て、実を取った？」とはどういうことか?!「二頭仕立て？」に見えなくもないが?!

今回もまた、ここでの論考が遅くなった！否、遅くなったと言うよりは、そもそも、今現在（これからも?）、ここで、「教育協働」とか、「社会教育（行政）」のことを論じたり（憂えたり?）、そのあり方（理想?）を示したり（期待したり?）することに、どれほどの意義があるのか？

国内外の悲惨な状況（もちろん、ウクライナの惨劇が突出しているが!）、どうにもならない社会の不合理や人間の不条理が至る所で露見しているわけであるが、考えてみると、みんな、それらは、他ならぬ「人間」が起こしているのである！

その「人間」の望ましい成長・発達、そして、生き方を希求して、「教育」というものの大切さや、そのあり方を考究してきた者にとって、その虚しさ（無念?）は計り知れない?!本当に、こんなことまで起きて（やって?）しまうのかと、「人間不信」「教育不信」は極み続けるのである?!

ということで、私は、もうここでは、その「教育」についてはあまり書きたくもないのであるが、もう一度だけ、「社会教育主事（社会教育士）」養成のことについては触れておきたい！それが、これまで、そのことに携わってきた私自身の意地であり、一つの自己承認ともなるからである?!

ただし、もちろん、そこには、ここで私が思いを何度吐露しても、ほとんど見る人もなく（直接の反応がない?）、たとえ見る人がいたとしても、独りの老兵?の「哀しきつぶやき?」にしか映っていないのではないかという思いと、

もう一つは、やはり今を生きる、あるいはこれからを創り出していく人達が、私が何と言おう（思おう）とも、自らの思いと力（意欲を含む!）で、現状を正しく受け止め、課題を解決していかなければならないという、ある種の「世代交代論」というべきもの（ある意味、もう知ったことではない!私のような、過去の?人間の出る幕ではない!そういうことでもあるが?）が交錯していることは言うまでもない!客観的に言えば、まさにそういうことである?!

さて、そんなことを思いながらの出足であるが、まずは、その社会教育主事（社会教育士）の養成に関して、標記の「名を棄て、実を取った？」とはどういうことなのか、確認しておきたい！

それは、その契機（養成カリキュラムの変更や「社会教育士」の制度的出現に至る経緯）はともかく、その後の実際の動きにおいて、本家本元の「(発令)社会教育主事」の養成・配置状況の改善（挽回?）はほとんどなされず、一方の「社会教育士」への期待の方が、本当は強かったのではないか?!

要は、一つは、本当に厳しい状況、とりわけ「(発令)社会教育主事不要論」

までもが飛び交う中で、新たな運用形態としての「社会教育士」（社会教育主事の資格を取れば、誰でも、どこでも「自称」出来る！）をスタートさせているわけであるが、実は、それは、危険水域に迫る？「発令社会教育主事」の養成・配置状況の克服を企図した、言わば「苦肉の策」とは言えるが、

そして、一見すれば、力強い「二頭仕立て？」になったように見えるが、発令社会教育主事の数は減っても、「社会教育士」と名乗る人が、一方であり、その総和が、従来並みか、それ以上であれば、それはそれで、打開となる?! ということであったのではないかということである?! だから、「名を棄て、実を取った？」と言えるのではないか?!

(2)「社会教育経営（論）」と「生涯学習支援（論）」は、そのための理論構築ではあった?!

いずれにしても、本当に、それでよかったのかどうか?! 実態を調べているわけではないので、その後、社会教育主事の発令状況、資格取得者の状況、そして、実際、どのくらいの人が「社会教育士」を名乗り、活躍しているのか等は、ほとんど分からないが（私が関わった、0 県の状況は分かるが!）、総じて、あまり芳しいものとは言えないのではないか?!

そして、ある意味、そのことは、事前に予想されたことではあるので、あまり驚いて（怒って?）はいないが、果たして、今のような推移でいいのかどうか?!

もちろん、ある意味低次元の話とはなるが、「いてもいなくても、実際には、あまり影響はない!」「やる気がある人ばかりであればよいが、そうではない人も沢山いる（仕方なく配属されている?）!」、そして、たとえやる気がある人であっても、通常は、ほとんどが短期間（2～3年間）で、その職を去っていく（役所の常としての人事異動）!

逆に、ある特定の人が、10年以上も、その職に留まっている! 挙句の果てに、その人に、すべてを任せて、他の人達は、ほとんどノータッチ（何も言わない、言えない?→私物化?）状態となっている!

だから、「社会教育士」の養成と存在（敢えて「配置」とは言わない! 否、言えない!）は、その新たな突破口となる?!

しかるに、こうした世間の反応、周囲の関心はともかく、文科省の決断は、おそらく（否、絶対に?）、従来の社会教育主事養成の主目的（発令社会教育主事の充実配置）は変えるつもりはなかった!

その証拠?としては、過去何度も触れたように、新しい養成のカリキュラム（社会教育主事講習）では、新たな科目構成として、従来の「社会教育計画」が、「社会教育経営（論）」と「生涯学習支援（論）」に分割、再構成されたが、それ自体は、あくまでも、社会教育主事養成の主目的に沿うものであることに変わりはないからである?!

ちなみに、私自身も、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（国社研）の講師陣の端くれとして、その実施に関わってきたが、実感としても、そうした思い切った養成策の転換というようなものは、さほど感じられてはいない?!

ただし、やはり、最後のコマの「社会教育演習」については、ある意味、折角の「社会教育士」の設定であるのであれば、その双方の立場（職場）や活動場所を最初から想定し、どのような専門性が、その双方の立場や活動場所で発揮される（べきな）のかが、「演習（模擬計画づくり）」の中心で然るべきなのではないかということではある！それがなければ、当事者達には、その実感は、ほとんど湧かない?!

とは言え、ここで、逆に危惧されるのは、そうした、新たな「社会教育士」の養成・存在に期待を寄せ、従来の（発令）社会教育主事やその配属そのものに異を唱え、いわゆる「社会教育（行政）」の存在や意義を雲散霧消させるような動きを見せているところ（人々）もあるようである?!

当座の状況（現実の対応）としては、ある意味悲喜こもごもの推移であろうことは、容易に推察されるが、是非避けられなければならないことは、従来の「（発令）社会教育主事」と新たな「社会教育士」の分離的養成（分断?）であり、前者を軽視した、後者だけの独走（迷走?）、そして、空騒ぎに終わらせないことである（その兆候は、既にある?）!

だからこそ、それを防ぐためにも、社会教育（行政）には、現実対応策として、「（発令）社会教育主事」と「（自称）社会教育士」の連携・協働のしくみをつくらなければならないのであり、そうしなければ、「（発令）社会教育主事」の、さらなる縮減（消滅?）と、「（自称）社会教育士」の無秩序な名乗り（極端に言えば、存在・動向が掴めない?さらには、社会教育行政を無視 or 忌避した存在になる?）はますます進行するのである?!

皮肉でも何でもないが、これが、最近はやりの「多様性」、そして、それが、「苦渋の選択としての『社会教育士』の措置」の目指すところということであれば、はなはだ残念で、悔しい結果だと言わざるを得ないのである?!

(3)とにかく、その資格や専門性（経験を含む）を、どのように生かすのか?そこが問題であり、課題である!!

そんな中、今、細々と?続けている、「教育協働セミナー（ズーム交流）」の、当初からの参加者／協力者である北海道の M さん達が、「地域づくりと社会教育主事、社会教育士の役割」について、改めて研究したいというようなことで、今月（12日）、来沖の予定となっている（かの高知の N さんも同行?）!

彼らが、どのような視点と課題意識を有しているのか?もちろん、直接聞かないと分からないが、少なくとも、そこには、上記のような、現在の社会教育主事の養成・配置状況についての、言わば冷徹な問題意識があるのかどうか?

そこが、心配でもあり、逆に、期待するところでもあるわけである?!

すなわち、それは、「(発令) 社会教育主事」と「(自称) 社会教育士」の連携・協働のしくみづくりへの戦略的視点（それは、昨今の「協働のまちづくり（まちづくり協働）」、「地域学校協働活動（教育協働）」においては必要不可欠なものである!）であり、そこに、両者が、どのように、それぞれの専門性を発揮すればよいのか?その現実的な姿・形を、是非研究して欲しいということである!

そして、それは、個々の社会教育主事/社会教育士の自覚と自主的な動きに委ねられるだけでよいのか?それとも、何か、力強い動きが必要なのかどうか?ここが、当面の課題となるが、これは、これまで何度も言ってきたように、社会教育法制度が、この課題に呼応できなければ、それこそ、社会教育（行政）の雲散霧消?に歯止めを掛けることは難しいということでもある?!

なお、そこで求められるのが、先の、高知のNさん達のような動きでもあるが、とにかく、そこには、「地域共生社会の実現」があり、教育や福祉等、様々な分野での仕事、活動が、どこの地域でも展開される必要があるということであり、そして、それらは、決して別々のものではなく、

否、別々に行われるべきものではなく、互いが協力し合いながら、問題・課題解決に当たる必要があるということである（だから、近年では、「協働」という概念が多用されるのでもある!）!そして、その共有の目標が、まさに「地域共生社会の実現」ということなのである?!

でも、それだけでは、有効な動きやしくみが見えてこない?!誰か（どこか）が、意図的、積極的に仕掛け、呼びかけなければ、現状は、なかなか打破されない!そこに期待されるのが、そうした役割（横串を入れること?）を本来的に担う「社会教育主事」なのであるが、その任用・活動状況が今一つの実態があり（否、確実に悪化している?）、

その一方で、その社会教育主事の資格を有し、誰（どこで）でも、その資格の有用性（と言うよりは、強き思い?）が発揮できる、新たな「社会教育士」の活躍が期待されるということでもある（もちろん、現実には厳しいものだが!）!

ただ、活躍している、あるいはしようとしている人であっても、その「名乗り」が敢えて必要なのか、そのこと自体に自問自答している人もいる?!また、そのやる気が発揮できなくて、失意に陥る人もいる（実際に、そういう人を知っている!）?!であれば、もったいない（社会的損失?）ということでもある?!

では、改めて、どうすればよいか?もちろん、個々の自由な選択?の問題ではあるが、せめて、その資格を付与する行政、及びそのカリキュラムを実施する機関（課程認定大学及び講習実施機関）には、ただ単に単位/資格付与を行うだけでなく、彼らの任用や活躍の場の開拓、構築を視野に入れて頑張ってもらいたい!

とりわけ、講習への呼びかけ、その後の研修等に、直接的な使命を与えられ

ている、都道府県レベルの教育委員会（付設のセンター等を含む！）には、彼らのネットワークづくりや活躍の場づくりを鋭意支援してもらいたい！そしてまた、指定管理者に委ねている、各種施設の存続・発展を望むならば、そのことは必須の取り組みとなる？それがなければ、絶対にうまくいかないし、折角の「二頭仕立て？」の試みも、絵に描いた餅となる?!!

（つづく）

6 見えているか？「コミュニティスクール」のその先?!ある意味、最後の主張?!

(1) “不登校の生徒が登校率 85%の奇跡 岐阜の“バーバパパのがっこう”に殺到する 全国の教育委員会が驚愕の光景”

早速であるが、標記は、過日ネット上で見つけた記事の見出しである！確かに、これには、目がいってしまう?!何故なら、最新の調査（2021年度分「問題行動・不登校調査」）でも、まさに「いじめ」「不登校」の数が減っていないからである（否、実は、過去最高である！）！

だから、その学校（「不登校対策特例校」。2017年施行の「教育機会確保法」で、国や自治体による設置が努力義務とされている。2022年4月現在、財政的な制約などから、その数は、10都道府県の21校（うち公立12校）にとどまっている）が、ある意味驚異的な成果を挙げているということになる?!

なお、全国の小中学校で、2021年度に「不登校」だった児童・生徒数は、前年度から24.9%増え、過去最多の24万4940人で、初めて20万人を超え、9年連続で過去最高を更新しているという。

折角であるから、もう少し詳しく見てみると、「病気や経済的理由などとは異なる要因」で、30日以上登校せず、「不登校」と判断された小中学生は24万4940人。小中高と特別支援学校の「いじめ」の認知件数は61万5351件で、ともに過去最多である。新型コロナウイルス禍による行動制限などで、人間関係や生活環境が変化したことが影響したとみられているが、「心のケアを中心とした早期の対策が必要だ」とされているようである。

ちなみに、小中の「不登校」の主な要因で最多なのが「無気力、不安」（49.7%）で、「生活リズムの乱れ、遊び、非行」（11.7%）、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」（9.7%）が続いているということである。

また、高校の「不登校」は、18.4%増の5万985人だが、過去10年でみると、ほぼ横ばいで推移しているということであるが、小中学校では、1000人当たりの不登校の児童生徒数は平均25.7人、都道府県でばらつきもあるが、最も多かったのは、高知の31.2人で、宮城の30.3人、島根の29.9人、最も少ないのは、福井の17.8人で、「早期対応に力を入れているかどうかなど自治体ごとの対策が反映されている可能性がある」とされている。

一方、「いじめ」の認知件数は、全校種合わせ61万5351件で、新型コロナによる影響などで大幅減少した前年度の51万7163件から一転し、過去最多になっている。小中の増え幅が特に大きく、小学校で18.9%増の50万562人、中学校で21.1%増の9万7937人である。

20年の全国一斉休校が明けて部活動や学校行事の活動が再開され、子ども同士の交流の機会が増えたことなどが要因だということである。

ということで、改めて、上記の学校とは、岐阜市立草潤中学校のことである

が（以前にも紹介したとは思いますが→「教育協働への道 79」。2021年4月に東海地方初の公立の不登校特例校として設置。全校生徒40人程度、教職員27人。教育長の強力なリーダーシップもあった？）、学校に行けない児童・生徒に配慮し、学習指導要領にとられない教育課程をもつ「不登校特例校」であり、開校1年半で視察が殺到しているというのである（100件の視察）！

授業は、自宅でオンラインでもOKだが、登校率は85%超。記事によると、「これまでの学校という枠の中で自分の才能を生かせなくて学校に行けなかった生徒、不登校を経験した生徒のための学校です。」ということで、

かの「バーバパパのがっこう」のような学校だということである（A・チゾン/T・テイラー著、山下明生訳の絵本：勉強嫌いで、学校も好きじゃない子供たちに、バーバファミリーが子供一人ひとりの好きなことや得意なことに合わせていろいろな学びを実現した理想的な学校をつくる話）。

（2）本当は、ここから何を学ぶべきか?! 敢えて言う！「当座の（言い換えれば「緊急避難的？」）対応」と「長期的な対応」の双方が必要なのだ！

ところで、この公立中学校（草潤中学校）が作られた背景には、同市の不登校児童生徒の数が全国平均と比べて高かったこと、統廃合で廃校となった小学校の再利用について模索していたことがあったということであるが、

不登校特例校の設置が決まったことで、どんな学校にしていくのか、大学教授や小児科医、フリースクール、教育支援センターなど、さまざまな立場の助言を受けるとともに、不登校を経験した通信制高校に通う高校生の声も参考に、そのグランドデザインが描かれたという。

そのアドバイザーのひとり（大学教員）によれば、「理想はバーバパパのがっこう」であり、そこで導き出されたのが、子どもが学校に合わせるのではなく、子ども主体の学校、学校らしくない学校というコンセプトであったということである。

例えば、担任も生徒が選ぶ、「個別担任制」を採用。生徒の希望を聞きながら、担当の先生を決めていき、2カ月に1回見直しもできる。環境も、生徒の居心地の良さを重視。塗装や備品は、“学校らしくない”デザインや明るくカラフルなものを選ぶ。常時解（開？）放されている、「マネジメントオフィス」という名前の校長室には、ビビッドなオレンジのソファが置かれ、くつろぎにくる生徒の姿もある。

また、この学校のもうひとつの特徴が、遅刻や欠席という言葉がないということ。代わりにあるのが、「ゆっくり登校」「自宅」という表現。授業は全て生配信され、学校に来て学ぶか、自宅で学ぶかを生徒が選ぶことができる。

自宅から参加する生徒は、授業中にやりとりができるか、放課後に個別担任とオンラインで面談などができれば、出席扱いとなる。廊下に貼られた「イマここボード」で時間割を見ながら、どこでどの授業を受けるかを自分で決めて、

その場所に入る。

そこで、改めて問う！全国の（中）学校が、この「草潤中学校」のようになるべきなのか？答えは、「否」である？！

何故なら、それは、あくまでも、ある一部の子ども達しか救えない？のであり（敢えて言えば、「自死」や重度の「ひきこもり」が回避されているということであるが？）、他方の、残された？大勢の、そうでない子ども達の問題（課題？）は、等閑視されたままか、潜在したままとなる？！

だから、実質的には、学校教育関係者の多忙や苦悩は広がることはあっても、決して軽減されることはない？！そういうことである？！

では、改めて、このような取り組みは、無視あるいは否定されるべきなのか？否、これも、「否」である！何故なら、それは、いわゆる「緊急避難的？な対応」としては意味があるのであり（苦しんでいる？子ども達にとっては、現時点での唯一の？居場所となっている！）、それが、現下の最善であるとも言えるからである？！

だとすれば、考えるべきは、改めて、この取り組みから何を学ぶべきか？ということになる？！結論から言えば、この「草潤中学校」のような取り組みを、新たな「しくみ」として、地域全体で、どのように創り上げていけばよいのかということになる？！

ただし、ここが重要であるが、上の提案は、少なくとも現状では、まったくの妄想ではある？！地域は、そのようになっていないし、危険や混乱は、ほとんど必至であるからである！

だから、難しいのであるが、しかし、そのことに目をつむり、目の前の対応だけに汲々としてしまえば、本当に必要な対策が見えてこない！それ故に、「当座（言い換えれば「緊急避難的？」）の対応」と「長期的な対応」の双方が必要だということである！

（３）学校と地域が協力（融合）して、学習や活動を行うしくみが必要なのである！

そこで出てくるのが、「学校」を、「空間的」、「時間的」に広げていく、つなげていくということが重要だということである！一カ所（一校）で、すべてを完結することは不可能であるし、そのデメリットも、大きいということである？！例の「総合的な学習の時間」は、そうした意義を有していた（る？）のである？！

そのような中で、例えば、担任も生徒が選ぶ（個別担任制）ということであれば、地域の中に、その担任に相当する人を、出来れば、自ら選び、お願いする（もちろん、複数でもよい！）。要は、自分が、自分の居場所（心休まる場所、学べる場所、人間関係、そして、必要な情報）を求め、動くということである（これは、何も児童生徒に限ったことではないが！）！

だが、一方で、明らかに、このことを、学校のすべての教育課程で行うことは無理であり、逆に、何のための学校（施設&教師）かという、根本的な矛盾も生じてくる?!

だから、例えば、以前にも述べた（かつて、経済同友会が提唱した「合校」ということである!）、午前中は、従来型の校内での学習・活動、午後からは、地域に出かけての学習・活動（そのまま校内で行うこともあってよい!）を行う!

そこでは、個々人の自由／自主選択（複数人／グループによるものも認める!）に任せるということであるが、大事なことは、それも、れっきとした「教育課程内」の学習・活動（「授業」!）であるということである!

つまり、これは、これまでの学校教育が有していた「固定した関係、固定した枠組み」を柔軟に再構成するということであり、それがもつデメリットが、都市化やDX化等の急激な進展に伴って、徐々に顕著となり（時代にそぐわなくなった?ただし、「良さ」もあったし、そちらの方が圧倒的に支持されてもいた?）、制度疲労が、その極を迎えているということである（教師が、多忙や、必要以上のプレッシャーを受け、心身ともに疲弊している?!）?!

こうしたことを言えば、かの「生涯教育」の理念に行き着くと受け止められる向きも多かろうと思うが、実は、「生涯教育（学習）」とは、そのような変革の動き（→「タテ・ヨコの統合」）を創り出そうという、言わば教育制度全体の「運動理念」でもあったわけである（少なくとも、私は、そのように捉えている!）?!

要は、「生涯教育（学習）」とは、「社会教育」の置き換え、あるいは焼き直しではないということであり、「学校教育」や「社会教育」の新たな姿・形、関係づくりを要請するものであったということである!

だから、「地域学校協働本部事業」や「CS（コミュニティスクール）」の動きは、新たな契機となり、それが、ある意味「スモールステップ」としての位置づけともなるのである（まだまだ、そう理解している人は少ないかもしれないが?）?!

だが、実際には、なかなか、その融合的な進行とはなっていない?!原因は、もちろん「生涯教育（学習）」理念の不十分な理解もあるが、もう一つは、何故、それをやるのか?どんなメリットがあるのか?その辺りが十分に煮詰められず、特に、学校内部の多忙感／負担感、不信感が払拭されていない（CSは、もともと「教師の負担」を減らすというのが触れ込み?）?!

設置数のみが喧伝されているが（「学校運営協議会」の設置等）、教師達にすれば、子ども達の成長・発達にどのような効果・メリットがあるのか、ほとんど実感されず、いたずらに制度化が進んでいる?!

何のためにそれに行うのかのモチベーションが形成されていない?!だから、それよりは、冒頭のような、「特別な学校」、そして、その成果に目が向くので

もある（その方が、切実感があり、わかり易い？）?!

いずれにしても、私が、今一度ここで言いたいことは、もうそろそろ地域学校協働本部事業やCS等の成果がどうなっているのか？その具体的な指標（いじめ、不登校、学力、否、学習意欲の状況等）が必要であるということであり、長期的な対応という意義・可能性を秘めていると思われる成果が、どうなっているのか？そこが知りたいということである?!

相関関係があるのかどうか？同じ教育関係者の思いと苦悩が、ある意味別々となっている（分断されている？）のであれば、これほど悔しい（悲しい？）ことはない?!

（つづく）

7 これからの「教育協働セミナー」は?!何が可能で、そして、意義があるのか?!

(1)どこにでもある「教育協働」の動き?!だが、それらは、まだまだ無自覚で、大きな輪となっていない?!

気がつけば、もう随分時日が経ってしまったが、昨年12月10日、第43回教育協働セミナー（この回は、玉城青少年の家との共催→第3回「事例発表セミナー」）が終わった。

そこでの事例発表テーマは、「ツナげ、ツナがる 稲作文化～仲村渠なかんだかり稲作会の地域づくりへの挑戦～」ということで（もちろん、ここでの「ツナ」は、稲束からつくる「綱」!）、発表者は、同稲作会のOさん（中心人物?N市職員でもある!）と、予定にはなかった、同じく同会のK夫妻（副会長。他県、他地区からの移住者。いわゆるUターン、Iターン組）であった。

その活動のきっかけ、発端は、伝統であった、同地域の「綱引き」を蘇らせる、その綱を、自前で設える、そういうところであったそうである!ちなみに、それは、自治会の活動とも連動しているという。

ここでは、紙幅の都合もあり、残念ではあるが、その具体的な活動の紹介はできないが（多分、当日の動画は、主催の玉城青少年の家のHP上にアップされている?!）、そこには、彼らの、地域の人達との地道な関係づくり（実は、これが、なかなか難しい?特に、沖縄は?）、そして、地元H小学校への学習支援、特に「食育・食の文化学習」につながられているという話が、私には、とても心に残った!

すなわち、ある意味当然?であるが、「やっぱりここにもあった?!『教育協働』の動き?!」ということである?!

やる気（思い）のある市役所職員（教育委員会の職務も経験!）、自らの住むべき場所（居場所?）を求めてやってきた、Uターン、Iターン組の若い夫婦、そして、彼らを温かく迎え入れている当該地区の人々（特に区長さん!）、彼らが、まさに、私の言う「地域づくりと人づくりの循環」を、人知れず?創り上げているということである!

しかるに、繰り返すように、「学社連携→融合」「コミュニティスクール」「地域学校協働活動（本部事業）」、最近年では「総合教育政策」というような施策、取り組み、そして、他ならぬ学校教育自体の方からは、「社会に開かれた教育課程」「アクティブラーニング（主体的、対話的で、深い学び）」「カリキュラムマネジメント」というようなことの提唱、

また、先号（6）で再び取り上げた「不登校特例校（岐阜市立草潤中学校）」の事例等を見るにつけ、どこにでもある「教育協働」への動きということなのである?!

とにかく、そこでは、上記のような「地域づくりと人づくりの循環」が必要

なのであり、それを実現させるためのしくみづくり（「ヒト、モノ、コト、カネ」の総合化、協働化）が必須だということである?!

ただし、それらは、これまた繰り返すように、個別に見れば、それぞれ素晴らしい成果を挙げているとは言えるが、まだまだ無自覚で、それ以上の大きな輪となっていない?!そういうことでもあるのである?!

要は、みんなそれぞれ、精一杯頑張ってはいるが、なかなかそこにある大きな壁や隘路の打破、超克には至っていない?!そこが、図らずも残念であり、今一歩、何とかならないかということでもある!

ちなみに、ここでは、かなり唐突ではあるが、一方では、ある意味壮大な取り組みではあるが、ユネスコ提唱の「学習都市 learning cities」（フォーマル教育とノンフォーマル教育の融合的進展!）の取り組み、

あるいは、「SDGs」に関わる「DX（digital transformation）化（ICT/AI/IoT）」や「GX（green transformation）化（地球温暖化対策）」、そして、それに直結している「ESD（education for sustainable development）」を進める世界的な動きもある!

それらは、まさに、「教育協働」の動きやしくみづくりを求める大きな流れとなっているのでもある?!

(2) 重要なのは、「ヒト（思いをもつ人）」「素材（解決すべき課題）」「地域（生活の場）」! 「教育協働」は、それらをいかに発見（自覚）し、それらをいかに有効に結び付けていくのかである!

ということで、ここで言いたいことは、このように、「教育協働」の契機・切り口は、様々な取り組みに伏在しているということであるが、しかし、そうは言っても、

他方では、次から次へと生起する、眼前の様々な課題・困難（最終的には財政面!）、さらには、これまでには遭遇したことのないような大事件や災害（大地震や台風、水害等）、そして、長引く新型コロナウイルス感染症の災禍、某国の、それこそ信じられないような暴挙（他国への侵攻）等も加わり、我々の生活全般に関わる危機（物価高騰を含む）、これまでの常識、社会枠組みを根本から覆すような混乱が、様々な形で進行しているのでもある?!

その中で、関係者達は、精一杯自らの職務・役割を遂行し（もちろん、教育の分野でもそうであるが!）、もうこれ以上は頑張りようがないというくらいまで追い込まれているのも事実である?!

果たして、このような状況（心境?）で、何が出来るというのか?!つまり、そうした困難な状況にあっても（ある意味、だからこそ?）、「『地域づくりと人づくりの循環』が必要なのであり、

それを実現させるためのしくみづくり（『ヒト、モノ、コト、カネ』の総合化、協働化）が必須なのである」と言っても、なかなかそれは、全体には広がって

いかないし、出来れば、これ以上の負担や労力を割きたくないと思う人が出てきても、まったく不思議ではないということでもある（理想と現実の狭間？）?!

ただし、そうは言っても、そこに微かに（辛うじて？）見えているのが、それでもなおかつ（ここが重要である!）、自らの困難、さらには被害や苦悩を乗り越えて（自らの生活や立場を犠牲にして?）、新たな生活、新たなしくみづくり、そして、新たな人づくりに邁進しようとしている人達がいるということである（やはり素敵な人間はいるのである!）?!

現に、これまで活気を無くしていた?、あるいは「生涯教育／学習の振興」と言う、ある意味馬鹿でかい壁（妖怪?）に立ち向かい、様々に頑張ってきて、しかし結局は力尽きたようになっていて?社会教育（行政）の意義と必要性を再認識し、再び元気に立ち上がろうとしているところもある（例えば「島根県」のように?→大判『社会教育』2023年1月号）!

要は、様々な思い、取り組みに伏在している「教育協働」の契機?!それを、誰（どこ）かが気づき、広げる、そしてつなげる!それは、誰でもいい、どこからでもいい!それらが、つながっていることが重要だということである!

だが、今、多くの人達が注目する「素材」（表面に現れている切実な問題点・課題、トラブル、事件・事故等の発生可能性?）は多いのであるが、その共有／共通の土俵としての「地域」、それを進めている「ヒト」が、現時点では、散発的、局所的であり、その動きは、まだまだ芳しいものではない?

だから、問題は、誰（どこ）が、それを発見（自覚）し、つなぎあわせるのかであるが、それが見えていない?!実は、そこに「教育協働」の目的が出てくるのであり、その実現を導くのが、「地域教育経営」というスタンスなのである!

(3) 様々な思い、取り組みに伏在している「教育協働」の契機?!それを、誰（どこ）かが気づき、広げる?!それは、誰からでもいい、どこからでもいい!まずは、それらが、つながることが重要なのである!

そんな中、改めて思い起こさせるのが、大学の卒業生達も含めた、多くの人達との出会いである!いろんな人／学生達がいた!そして、夢（ある人にとってみれば苦勞、否、苦悩?はたまた愚痴の聞き手?）も共有した（ある一時期であっても!）?!

彼らは、今、どこで、何を思い、どのように生きているのか?例えば、社会教育と出会った、社会教育を知ったことが（本当は、「教育全体」であったのであるが!）、現在、どのように、彼らの生活、そして、彼らの職務や活動に息づいているのだろうか?単なる思い出?、貴重な経験?、それとも後悔?それこそ、いろいろあろう!個々人の人生という意味では、まさにそういうことであらう?!

とは言え、今ここで私自身の心残り?があるとすれば、やはり、そうした「ヒ

ト」のつながりの希薄化である！思いのある人、何かを実現、あるいは何かを変えなければと思っている人は、それこそ、どこにでもいて、その人なりに頑張っている（きた）わけであるが、

要は、如何せんそれらが、ある時から（卒業とか、就職とかを含む）、それらとは直接関係のない（本当は、そうではないのであるが？教職の場合は、特にそうである！）分野・場所、あるいは部署・機関へと、それこそ、活躍の舞台を変えていってしまうのである！

こちら側からすれば、同じ顔触れ、同じスタンスで、ずーと一緒に頑張っていけないということであるが、それは、ある意味、社会（直接的には、いわゆる「ノンフォーマル教育」としての「社会教育」）の宿命ではあろうが、持続的な活動や取り組みの協力関係が結べない、作れないということでもある！

しかも、それぞれには、それぞれの思い・生活がある！それは、私自身がそうであったように！そういうことでもある！

だから、今の私の現実としては、それを、かなり悲観的ではあるが、新たに出現している、かの「社会教育士」のみなさんに（もちろん、名乗っている人ばかりではないが！）、そして、玉城青少年の家（→一社・沖縄じんぶん考房）のみなさんのような「ヒト」に思いを寄せざるを得ないのであるが、

そうした「ヒト」への思い・やる気が、少しでも他の同じようなみなさんへと届き、そして、それがまた、大きな地域づくり、教育協働へのしくみづくりにつながっていくことを、改めて期待したいということになるわけである！

だが、それは、今（から）の私にしてみれば、まさに「託すこと」以外に術はないということでもある！

しかも、実を言うと、さらに残念ではあるが（悔しい？）、私自身が呼びかけてきた、現在の「教育協働セミナー」自体の役割は終わった?!思いとは裏腹に、事実上、力が尽きた？否、思いの熱量が下がったと言ってもよい?!そういうことも名状しておきたい（ということは、「(新)教育協働への道」も、ある意味ここで終わり？）！

とは言え、書きたいこと（書かなければいけないこと、否、私が書けること？）は書いた！順不同で、さほど体系的でなかったが、私なりに精一杯書いてきた?!だから、未練はない（本当である！）！

結局は、そういうことでもあるが、ならば今後、何が可能で、意義があるのか?!それを追求していかなければいけない！そうしたことを、改めて受け止めながら、次なる形を模索していかなければいけない！

今月（1月）28日（土）に予定している「第44回セミナー」では、そういうことも話題としたいのであるが、参加者のみなさんから、大いに意見・要望をもらい（ただし、なかったらどうしよう?!）、そこからまた、具体的なアクションを起こすことも一計であろう?!

現実的には、かなり厳しい自己決定、自己選択を迫られるであろうが、それが今の私の立ち位置であることは、おそらく間違いない?!そう思う次第である！

(つづく?)

8 最後のあがき？否、新たな可能性の追求？「教育協働セミナー」の次なる形は？!

(1)折角の原稿執筆依頼があったので、それに関わる論稿を加えることにした！

もう、ここでの「新・教育協働への道」の執筆も、一応終わりにしようかと考えていた矢先であったが、思わぬ原稿執筆依頼があり、折角なので、ここに、それに関わる論稿を加えることにした。

ちなみに、その原稿執筆依頼であるが、こちらも、もうそれはないだろうと、卒業を意識していた（諦めていた？）、例の『社会教育』（日本青年館）からの依頼である！何でも、今年の5月号に、最近紙面を賑わせている「学校の部活動の地域移行」についての特集を組むということで、私にも、関連の論稿をお願いしたいということであった。

そして、その依頼文（メール）には、「本誌『社会教育』2013年10月号99ページの、『土曜日』の学校・地域・家庭と社会教育（井上講四先生の提案）の図がとても気に入りしました。（10年前ですが、この立体的な図が、役に立つ時だと思いました）」とも書かれていた。

ということで、上記の、編集長Kさんからの甘い囁き？にほだされ、そして、「よくぞ、そんな昔の？図を見つけてくれたものだ！」と思いながらも、「やっど？その図が日の目を見る時がきたのか？」とも思い、今の私には、それなりに複雑な心境ではあるが、引き受けることとした次第である！

なお、件の図は、そこでの註にも書いていたが、私の教え子であった、当時の大学院生N君の、何とも素晴らしい作図で、簡単に言うと、私の元図（「教育の三層構造図」）からの発展、よりよい活用のための（分かり易く、説得力のある！）応用図？であった（ということは、当然彼に、同図自体の著作権はある！）！

しかるに、その図はともかく、思い起こせば、これまで、難解で（本人は、さほどそうとも思っていなかった？）、読みにくい（句点や括弧書きがやたら多い？）論稿を、実に沢山書いてきたものである（中には、単行本になったものもあるが！）？!

もちろん、それが「仕事」であり、いわゆる「業績」の一番に位置づくものであったが、こうして、改めて、そうした論稿や自作図を振り返ると（もちろん、その一部であるが！）、よくぞ、こういうことを書き、図も作ってきたものだとは思いますが（我ながら感心する？）、とてもじゃないが、今の、そしてこれからの私には、到底そういうことはできない！否、したくもない（実際、無理である！）？!

さらに、ほとんどが自己満足？で、現場実践には役立っていない?!時代の片隅に放り投げられているか、処分を猶予されて、本棚やファイルに静かにしまい込まれているか、はたまたUSBという、小さな記憶ボックスに収納されて

いるかであるが、いつのまにか、その所在さえ、覚束なくなってしまうている！

こんな研究者・学者？は、私以外には、あまりいないであろう（その意味で、私が研究者／学者ではなかったということは確定している？）?!そんな訳で、みっともない自己開示ともなっているが（しかし、これが、卒業、そして引退という、厳しい現実であろう？）、以下、しばしそのことは忘れて？、本題に入っていくことにしよう！

(2)「部活動の地域移行」この問題は、ある意味「必至」であり、「本質的な課題」を提起するものである！

そこで、まずは、ここでは、この「部活動の地域移行」の問題は、ある意味「必至」であり、「教育」に関わる「本質的な課題」を提起するということを主張しておきたい！

もちろん、眼前の課題は、顧問教員の負担（過重労働）、そしてそれを、「教職員の働き方改革」の一環として、どう解決していくのかということであるが、そもそも「学校の教育活動」は、最早「質的にも、量的にも」、今の枠組みでは、到底対処出来るものとはなっていないということである?!

増えることはあっても、減ることのない負担が、常に付加される状態になっているということでもあるが（「教科書」は薄くなっても？「教科数」は、さほど変わらなくても！）、教科横断型（「コアカリキュラム」等）と呼ばれるような指導（学習）内容の組み込みや広がりを見れば（キャリア、食育、安心・安全、金融、ITC、さらには「郷土学習」等）、それは、まさに一目瞭然であろう?!

ただし、それは、もちろん必要・必須な指導（学習）内容であり、しかも、近年の「社会に開かれた教育課程」というような方向性においては、至極当然だとも言えるわけである！

ただ、一方で、それを担当する教職員の負担・対応能力は、基本的には、そうっておらず（ある意味当然である！）、さらには、学級崩壊とか、いじめの潜在（or 顕在？）、あるいは、現下の「新型コロナ感染」による予期せぬ負担、重圧の連続による心身の疲弊（同僚性の脆弱化→孤立・孤独化）、そして、病気等による「休職」が増えている！

いわゆる「研修」の充実、今はやりの「リスキリング（学び直し）」の必要性・有用性等が声高に叫ばれても、多くの教職員には、その福音は届いていないのである（だから、「働き方改革」は、「働きがい改革」であって欲しい!）?!

ところで、一方で、このような状況を見るにつけ、この問題は、実は1990年代初頭の、かの「学校週5日制」の導入期の問題（論議）と、ほぼ一緒のような気がする?!

当時、「（土曜日の）地域の受け皿づくり」とか「土日の教育力」とかというようなことが、しきりに言われていたことを思い出すのであるが、結局は、そこでの本質的な課題解決が先送りにされていたということであり、その課題の

大きさ、難しさが、さらに増大しているとも言えるわけである（だから、大変なのでもある?）?!

例えば、この「部活動の地域移行」の問題は、同時期（少し遅れた?）に主張され、導入された、かの「地域総合型スポーツクラブ」（文科系の活動も、一部組み込まれていたところもあったように記憶しているが?）のあり方等とも、課題を共有していることは明らかである?!

すなわち、今回は、直接的には、いわゆる「スポーツ系の部活動」の、しかも、土日等の休日での活動の仕方が議論されているわけであるので、この「地域総合型スポーツクラブ」のあり方は、その問題と直結していたとも言えるということである?!

したがって、それは、そそくさとした、「臨時職員」あるいは協力者の採用・配置等とは訳が違うということであるが、とにかく、そのことに気がついた人達が、何とか本質に迫る課題解決への動きを創り出していかなければ、事態はもっと深刻となる?!そういうことでもある?!

「理想を言うな!」と言われれば、それまでだが、そのツケ（問題の先送り）は、最早限界にまで達している?!

繰り返しになるが、部活顧問教諭の代替・代行、あるいは、それを引き受ける当座の指導員／協力者の確保（アウトソーシング）の問題ではなく、これまでの学校と地域社会の関係を、さらに言えば（厳密に言えば?）、学校教育と社会教育の連携・協力のあり方を、どのように構想（再構築?）していくのかという問題であるということである!

(3) 新たな対応のしくみを、自ら構築していく他ない!そして、それは、これまでの発想（取り組みのスタンス）を抜本的に変えていくものでなければならぬ?!

ということで、この問題は、一部響きを買うかもしれないが、一つの大きなチャンスであり、変革への一ステップとなるということでもある（往々にして、目の前の大きな課題・問題とならなければ、多くの人あるいは行政は重い腰を上げない?）!

そして、そこで出てくるのが、例の「総合教育政策」、私からすれば、まさに「地域における教育協働」のあり方／しくみづくりであるということである?!だが、まだまだそのような捉え方は、残念ながらなされておらず、取り組みや問題意識も、それこそ千差万別である?!

例えば、某県のマスコミ紙によれば、教職員の意識（認知状況）もさることながら、子ども達や保護者への説明等は、ほとんどなされていないようである（現時点では、重要課題とは意識されていないということか?）!

しかも、明らかなように、学校の部活動といっても、学校段階（小・中・高）によって、その態様は違っているし、さらには、現実的な問題として、大会等

での勝利を目指す、いわば「競技スポーツ」的なものと、それに親しむ、あるいは健康・仲間づくり的な「楽しむスポーツ」とでは、その扱いはかなり違って来る！

そして、何より課題となってくる（意見の対立を生む？）のが、土日（休日）と平日の活動を、いかにリンクさせていくかということである（競技力や意識・モチベーションの維持・向上の問題）。

そして、さらに、そんな中で懸念されるのが、「学校での部活動」が、いわゆる「教育課程外の教育活動」であり、それが、今新たに学校教育に必要なのかということが俎上に上がり、

例えば、あっさり「地域移行にすればよい！しかも、やるかやらないかは、まったく個人の自由である！」というような結論が出され、結局は、そうした教育（学習）活動が、「こっち（学校）からあっち（地域社会）へ」という一方的な落着となり、折角の「学校教育と社会教育の合力の形」が模索される機会が、そこで閉ざされてしまうということである？！

もちろん、それが、関係者の総意であれば、それはそれでよいのであるが…？！

そこで、ある意味常識的な提案とはなるが、まずは、短期的な視座と長期的な視座、双方を有しながら、「学校教育関係者」と「社会教育関係者」が同じテーブルに立って、この問題の解決に取り組んで欲しいということである！そして、それが、実は大きな意味をもつということである（「教育は一つ」なのであり、単純な「代行探し」だけで、終わって欲しくないということである！）！

さらに言えば、それが、「社会教育再生？」の突破口ともなるということである（その意味では、かの「社会教育士」の活躍如何は、実に大きい?!）！

もちろん、そこでの各々には、人事異動や各種の制約（「前例踏襲主義」や「役職・立場の限界」）の下で、粛々と与えられた仕事をしている（直接には関係がないと思っている？）、あるいは目の前の業務をこなすのが精一杯でいる人達もいる（余裕で、あるいは上手に手を抜いたりして、その場を凌いでいる人もいるかもしれないが?）?!

だからこそ、それらを何とかするためにも、絶対に必要となってくるのが、新たな「関係者のトータル・コーディネーター（教育協働コーディネーター）」、そして、その「ネットワーク（協力体制）づくり」である！

であれば、我が「教育協働セミナー」は、そうした、言わば「時代が求める」新しい人材への注目（「養成」としたいが、それ自体は分を超えている?）、彼らへの可能な限りの支援を行っていくことが、次なる形となる?!

それが、それこそ私の最期のあがきとなるのか、それとも、新たな可能性の追求となるのか？

もちろん、それ自体は、今の私には分からないが、賛同する人達、人知れず何とかしようと思っている人達が、力を合わせ、情報の共有や新しいシステム

の構築を行うことが出来れば（しかも「仕事」として!）、これほど嬉しいことはない?!そんなことを思っただけ、ここでの論考でもある!

(つづく?)

9 驚愕?! 事実（先進事例）は、ここまで来ている?! ただ、惜しむらくは…?!

(1) 気がつけば、こんなことまで実現している?! やはり、これは、「必然?」なのか?!

先号（8）では、「最後のあがき? 否、新たな可能性の追求? 『教育協働セミナー』の次なる形は?!」ということで、私自身にとっては、かなり微妙な? 論稿をアップしていたが、ここに来て、少しだけ? 心境が変わってきたようにも思える（希望がある?）?!

と言うのも、最近ではほとんど馴染みとなっている? ネット情報からではあるが、そこで、有意義、かつ、驚くべき? 考え方や取り組みに出くわしたからである?!

記事自体（対談記事）は、多少（かなり?）商業主義に乗っかっているようにも見えるが、それらは、どうしてもここで取り上げるべき内容であり、そして、まさに、そこから、「気がつけば、こんなことまで実現している?! やはり、これは、『必然?』なのか?!」、そういうことを伝えたいのである?!

そこで、まずは、その対談記事であるが、それは、教育ジャーナリストのおおたとしまさ（太田敏正?）さんと、以前ここでも紹介した（→「教育協働への道」34）、教育学（哲学）者の苦野一徳さん（熊本大学准教授）とのものであった。

5回に亘る対談記事であったが（第1回「良い教育とは何か?」、第2回「学校でのお手紙禁止? よい学校とそうでない学校の『明らかな差』」、第3回「『不登校』という概念を無くすために必要な『多様でごちゃまぜの学び舎』」、第4回「『地域での教育』が育むもの」、第5回「エビデンスを重視する教育データ利活用についての注意点」というようなことであった?!）、個人的には、もちろん第3回と第4回が、大いに注目された!

すなわち、そこでは、「学びの機会・場のネットワーク→ラーニングセンター」というようなキーワードがあり、「異文化、異世代がごちゃまぜになりながら学び合える公立学校→『多様』なごちゃまぜの場の必要性」「『地域』というキーワードは、今後いっそう意識したほうがいい」「かつては地域コミュニティで普通にあった出会いの場を、今は人為的につくる必要がある。

そのための最高の『ハブ（拠点）』が学校。結局、地域づくりと学校づくりは、必ずセットでやるべき営みだ」、というような文言もあった! まさに、それは、私が長年提唱してきた「地域教育経営→教育協働」のコンセプトそのものではないか?!

その中で、「経済格差が教育格差に直結する→誰もが多様な教育機会にアクセスできる必要がある」「自由になるための力を育むための教育とはどういうことなのか、よい学校とはどういうものなのか…公教育こそ、改めて、この最上位の目的（「自由」と「自由の相互承認」）を意識し直そう。この本質を見失っ

てしまったケースは、いまの学校には少なくない…お互いを監視して責め合う教室文化→相互不寛容を育む?!

→頭ではわかっているけど、実際のクラス運営では別のことが優先?→トラブル回避とか、保護者からのクレームが来ないように?!教員たちを委縮させてしまうほどの、教育現場に対する不寛容、厳し過ぎる視線がある?!→だから対話が必要!学校は、失敗を思い切り、安心してできる場である必要がある!

本来の教育とは真逆のことが、現場の学校にはある?!→先生自身の対話が必要である(→同僚性/対話型の研修の重要性)」etc.!

確か、このような物言いであったかと思うが、改めて、苫野氏による、「教育における大切な原理は、各人の『自由』と『自由の相互承認』、そして『一般福祉』。教育は、全ての人が自由に生きられる力を確実に育むためにある。

…ここで言う自由とは、わがまま放題のことではなく、生きたいように生きられるということ、そして、自分が自由に生きるためには、他者の自由もまた承認し、尊重する必要がある。これが『自由の相互承認(→民主主義社会)』。

…だから、教育の政策としては、『一般福祉』の原理が重要となる」ということも、ここで改めて、確認できたということでもある(『学問としての教育学』日本評論社)?!

(2)「きっかけ」はどこからでも、何からでもよい!問題は、そこに何を見出しているかである!

ということで、まさにそうであると、改めて大いに共感するものであるが、一方で、私が、今ここで何より評価したいのは、「地域や保護者もまた、学校づくりの担い手である!」ということで、福島県大熊町の「学び舎 ゆめの森」(「ごちゃまぜのラーニングセンター」)が、新たに紹介されているということである!

これまでは、「学校という『箱』の中に子どもたちを入れ込むことで教育の機会均等を実現しようとしてきたけれど、それはもはや限界が来ている。だから、これからの教育行政は、オンラインも含め、すでに至るところに存在している学びのネットワークを、一般福祉にかなう仕方で再ネットワーク化すること(モザイク模様の学び環境:おおた)が重要な役割になってくる」。

そして、「適切にアクセスできるようにするためには、どういう教育の機会があるのかということを知って教える『コンシェルジュみたいな役割』(総合世話係?)が必要。今これだけ『学びの個別化・協働化・プロジェクト化の融合』とか、『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実』と言っているのに、一斉授業をモデルにした研究をするのはやっぱりナンセンス」ということも!

震災からの復興、これは、ある意味特別な事情からとも言えるが(もちろんこのことは、軽々には言えないが!)、要は、「きっかけ」はどこからでも、何か

らでもよいのである！問題は、そこに何を見出し、どういうことを実現しているのかである！

そこで、その「学び舎 ゆめの森」であるが（別途調べてみた！）、まず「認定こども園と義務教育学校、預かり保育、学童保育を一体にした施設」（保護者の皆さんが安心して子育てできる環境）で、「地域の中心として0歳から15歳の子どもたちが、共に学ぶ場所」（子どもたちがともに遊び、学び、さらに地域の方々とも協働していく学び舎／多様性に満ちた社会において、子どもたちが自分で考え、人と協力して生きていく力を育む）とある。

そして、「『温故知新』誇りを持って、自分の未来を切り拓く」（教育方針）、「自分で学びをデザインできる多様性と混在が共にある、新しい教育空間」（コンセプト）が示されている。

具体的には、「三角形の組み合わせで生まれる自由につながる空間」（三角形の鉄骨のフレームを組み合わせた自由な形状の建物）、「図書ひろばを中心にした多様性と混在が共にある場所」（中心には吹き抜けの大きな開放的な図書ひろばがあり、子ども園、小学校、中学校、職員室、体育館、パレット（特別教室）を放射状に配置）、「自分で学びをデザインできるどこでも教室になる自由な学び場」（同じ大きさの部屋はない）。

さらには、「デジタルとアナログ」（本に囲まれた空間で、デジタル教材の使用）、「遊びながら学ぶ学びながら遊ぶ」（五感を動かす様々な仕掛け）、「地域と共にシェアする0歳から100歳までの学び舎」（体育館、創作工房、図書ひろばなど→町の交流拠点）。

そして、そこに、「学びの環境」（特徴的な形の、11のエリアによって構成される校舎）が出来上がっている！

なお、この周辺は、震災後の「復興拠点」とされ、役場庁舎、交流施設／商業施設、公営住宅、宿泊温泉施設等が、まさに「まちづくりとひとづくり」の中心地（センター）を形成している！

(3)ただ「残念？」なのは、そこに「社会教育（行政）」への言及がないこと?!

それは、一体何故なのか？

とは言え、やはりここで「残念？」なのは、そこに「社会教育（行政）」への言及がないこと、つまり、そこでの言質や取り組みに、これまでの隘路や不十分な点を、どのように受け止め、それを解決しようとしているのかが（「社会教育（行政）」の存在意義や、これまでの実績を、正當に評価していない？→首長部局への権限移譲→教育委員会の衰退？）、理論的に明示されていないということである?!

言い換えれば、これまで声を大にして、社会教育側から、そして、「生涯教育／学習（論）」の立場から、そうした、学校と地域の協働（ある意味「再生？」）の必要性を説き、そのための理論構築（「地域教育経営論」）、そして、その具体

的なシステムづくりの「見取り図？」(教育の三層構造図→ひとづくりとまちづくりの循環構造図)の提示を行ってきた(つもりの?)私からすれば、何とももどかしく(ある意味悔しくもある?)、やはりどうしても、ここではそのことに言及しなくてはいけないと思うのである!

もちろん、その原因は、「教育」と言えば、やはり「学校教育」のこと!「家庭教育」や「社会教育(ただし、これを、「地域教育」と、普通に表現する人も多い?)」のことも知ってはいるが、問題となっている「教育」というのは、この学校教育(直接的には子ども達の教育)のことであるという意識や行動が、ほとんどの関係者の間で、無前提に(あるいは無意識の内に?)なされているからであろう?!

かなり辛辣に言えば、「社会教育」のことを、ほとんど知らない(否、知らないで過ごしている?)、あるいは、その存在意義や成果を軽く見ている(いわゆる「勉強」や進学・就職等には関係ない?)?!そういう現実(実態)があるということでもある(言いたくはないが、関係予算や要員の配置等の違いも!)?!

ひいき目にみれば、かの「地域」という文言に、その「社会教育(行政)」のことも含まれているとも言えようが、これもまた、これまで何度も述べてきたように、ただ「地域」というだけでは、その「社会教育(行政)」の内容や存在価値は伝わらない?!

また、よく、「ひとづくりはまちづくり!まちづくりはひとづくり!」とは言われるが、それを、権限や守備範囲の話で終わらせてしまっている部分もある?!大切なのは、いかに、双方(の意義)を大切にしながら、互いの持てる力(or 成果)を生かし合えるかなのである!

単なる「移行」や、一方への「統合」で済む話ではないのである!何が大切なのかを、真摯に考えていけば、どうしても、そういうことになるのである(それは、過去の大きい反省からではあるが、人間社会の英知、ある意味自然の摂理でもある?!)!

今までは、私自身も、そのことは、あまり前面に出す必要はない?いつか、それぞれが、その存在意義や成果を感じて(見つけて)くれれば、それでよいと思っていた(その方が、より社会教育の特性(自主性/自発性)に合致している?)?!

だが、今や、気がつけば、「学校教育」のこと(だけ?)を論じていた関係者達が(今回の対談者達も含めて?)、実は、事実上は、「社会教育(行政)」のことまで論じている(あたかも新しい考え方、取り組みかのように?だが、それは、学校教育へのアンチ、否、カウンターヒーローにとどまっている?)?!

もう、明らかであろう!そうした考え方、取り組みが、これから求められる課題対応(少子高齢化/地域活性・復興等)への大きな力とはなるが、同時に、そうしたことがいかに重要なのかということ、改めて、**かつ正当に?主張・**

実践できる「ひと」が必要であるということである！

それは、結局は、一人ひとりの自覚（実力）に依るということになるが、その福島県大熊町の取り組みは、そのことに、いかに応えていってくれるだろうか?!

(つづく?)

10 心配はない?!心ある人達は、そこここにいる?!思いが、事態を打開させていく?!

(1) 久しぶりに訪ねた、「教育協働?」(今でいう「地域学校協働活動」)が行われていた島(村)?!

ということで、気がつけば、この「新・教育協働への道」も、今回で、早10号となる!

曲がりなりにも、書きたいこと、書かなければいけないと思っていたことは、「教育協働への道」という形で100号まで、かなりの順不同、かつ内容的な(質的な?)凹凸はあったものの、一応、書き終わったわけであるので、その後を書き加えていく?のは、正直しんどかったが(事実、執筆頻度は、極端に低下!)、何とかここまで来たというところである!

いずれにしても、これから先、どのようになっていくのかは、今のところ何とも言えないが、今回は、何らかの、新たな節目?であることは間違いないので、それに相応しいテーマ(トピック)で、何か書いてみよう!そんな思いでの、ここでの論考となる!

そして、実は、そう思わせたのは、過日訪ねた、沖縄県I島(村)であり、そこで仕事をしている役場職員の生き様(心意気?)である!束の間の再会?であったが、改めて、様々なことを考えさせられたわけである!

ちなみに、この島(村)のことや、そこで働く役場職員、あるいはユニークな島民?(家業は写真屋でありながら、若者達が民泊できるようにと、素敵な手作りペンションを、自ら楽しみながら建てていたKさん!)のことについては、様々な記憶・思い出があるが、現役時代(琉球大学在職中)、それも、ある意味最高潮?の時に、学生(ゼミ生)達と、何度も足を運んだ、そして、本当に世話になった!そういうことである!

その後は、残念ながら(当然?)、ほとんど連絡も取り合わなくなっていて、ご無沙汰もよいとこだったのであるが、私の奥さんが(彼女も、何回かは同行していた!)、この度偶々、同村の「ユリまつり」(かなり有名となっている!)を見に行きたいと言い出して、何故か?私も、これを逃したら、もう当地に行くこともないだろうと思って、訪ねた次第である!

しかるに、長い間音信不通であったので、当時世話になっていた知人(Sさん。当時の教育委員会職員)にも、たったそれだけの用件で連絡するのも申し訳ないと思い、憚られましたが、意を決して電話をしてみたら、予想外の好反応?で、宿の手配(親戚筋がホテルを経営しているとのこと)や自家用車の使用等、本当に有難い対応をしてくれた!

ここでは、そのユリまつりのことや、有名な塔頭^{たっちゅう}登りのことは記さないが(別コーナー「『岳陽』と共に」で、少し触れている!)、とても楽しい、そして、充実した一泊二日の旅であった!

正直言って、そんなに歓迎されるとは思っていなかったもので、懐かしさとはともかく、人の情けというか、島（村）の温かさが、改めて感じられた（仕方なく？あるいは義理で？対応してくれたのかもしれないが）！

こんなことを縷々書いていくと、すぐにスペースがなくなり、書かなければいけないことも書けなくなるが、それは、一言で言うと、この島（村）は、今でいう「地域学校協働活動」、まさに、私の言う「教育協働」が行われていた島（村）であったということである（多分、今もそうである?!）?!

(2) 離島・僻地には、当然？「それ故の」厳しさ・苦しさ（問題点・課題）がある！しかしながら…

そこで、ここで改めて書きたいことは、前号（9）で、福島県大熊町の「学び舎ゆめの森」のことを書いたが、実は、極端に言えば、このI島（村）は、まさに島（村）全体が、その「学び舎ゆめの森」と言ってもいいような気がするということである?!

もちろん、それは、ハード面ではなく、ソフト面、つまり、考え方、あるいは村（島）のコンセプトというような面でということである?! 要は、「ひとつくりとまちづくり」の循環（往還）を意識した取り組み、事業運営がなされていた（る?）ということである?!

ところで、そうは言っても、沖縄には、確か「島ちゃび」というような言葉があったように記憶している！

改めて、ネットで調べてみると、「…台風はしばしば猛烈な暴風雨を伴い、農作物などに大被害を与えることがある。また多くの離島からなるため、古くから離島苦(島チャビ)をかかえて、常に自活の道を歩まねばならなかった。この島嶼性、離島性と本土を遠く離れた隔絶的な環境は、沖縄の地域性に大きな影響をおよぼし、独自の歴史・文化を生み出す要因となった。…」(世界大百科事典内の「島チャビ」の言及) というものがあつた。

ある時期に、県の委員会（「生涯学習審議会」だったかな?）の仕事で、答申文を作成した時に、そうした文言に出くわしたことがあり、そのことを、それに盛り込んだような気もするが、ひょっとしたら、それは、そこからの出典かもしれない（しかし、もちろんここでは、そうした経緯は、直接は関係ない!）?!

それはともかく、ここ沖縄には、まさに「離島苦、島痛み、孤島苦／福祉、医療、教育などの、離島で生活する人々の悲惨な状況」があつた（まだまだそういう所は、沢山ある?!）ことは事実であり、その「島ちゃび」をいかにして克服するかが、それぞれの地域（島）の、唯一最大の課題であつたということであるが、

今思い出すのは、彼ら（教育委員会）がしきりに言っていた、いわゆる「15の春」問題であり、その派生としての「高校中退」の問題であつた（島から出た高校生の中退率が、非常に高い!）! 他の地域（都市部）と違って、（島に）高

校がないので、否が応でも中学を卒業すると、島外の高校に入学しなければいけないのであるが、やはりまだまだ親元を離れて自活（自立？）するのが出来なくて（生活状況が変わる／孤独に陥る？etc.）、結局は、高校を中退するまでになる?!

だから、当時、彼ら（関係者）が語気を強めて言っていたのは、学校には、学校でやらなければいけないこと（学習指導？）は、しっかりとやってもらって（その意味で、学校を信頼する!）、それ以外のこと（生活指導？）は、自分達（地域）でやる!それが、村（島）の人達の願いであり、覚悟であると!

それ故に、社会教育が大事であり、そこにおける、地域の中心人物（今で言う「コーディネーターor コンシェルジュ?」）としての社会教育主事の役割は大きいというものであった（だから、一人の有能な職員が、かなり長い間配属されていた!10年くらい?ただし、資格は取得していなかった!複雑な事情であるが、資格より何より、経験とやる気が必要だということであったろう?）?!

余談ではあるが、その中には、後に教育長にもなり（現在の村長、副村長もそうである!）、また、役場の重要部署の課長等を引き受けている人もいる!まさに「ヒト」がおり、そしてまた、その「ヒト」が育っているということでもある?!

(3)一つの総括?として!心配はない?!心ある人達は、そこここにいる?!思いが、事態を打開させていく?!

さて、その後（調査等を作り、必要な施策を講じた）、高校の中退率は下がったということであるが、新たに懸念されるのは、その村（島）の若者達の島離れ（戻って来ない／来られない⇔働く場所がない?→過疎化の進行）であり、特に、役場職員の子達の島離れ（この場合は、戻って来たくても、来られない!）が問題であるという!

役場関係の職には限りがあり、たとえ公正な採用であっても、村（島）の人達からすれば、それ自体が羨ましい?話となり、自分も、子ども達も、何か後ろめたい思いになっているのだという。

役場の職員としての思い（経験や使命感やプライド?）を、我が子にも伝え、後輩の一人として頑張って貰いたいという願いがあるが、なかなかそのようなことにならないのだともいう。

ということで、私が沖縄に来た頃（1990年初頭）までは、各地で?、そうした情実採用等が大手を振っていたようにも思うが、それは、ある意味行き過ぎた?反動なのではないかとも思う?!まさか、こういうことが起きているとは（ある意味、過疎化に拍車をかけている?）?!

本当に、複雑であるが、とは言え、一方では、一つの総括?として、前にも掲げたようにも思うが（しかも繰り返し?）、「心配はない?!心ある人達は、そこここにいる?!思いが、事態を打開させていく?!」、そのことを再確認したい

ということである！

それは、以前にも紹介した（「新・教育協働への道2」）、同じ福島県の檜葉町の「地域学校協働センターを核とした持続的な地域づくり～3・11から11年目を迎えた原発事故被災地 檜葉町の教育による地域再生の試み～」(執筆者：同町教育委員会指導主事/地域学校協働センター長のSさん)でも思ったことであるが、

過日、教え子？のK医療福祉大学のS君(教授)(+？T大学のY教授)の計らい(情け?)によって訪れることができた、O県内の二つの小学校区(Y町立Y小学校/T市立K小学校)の取り組み(CS)からも、そのことは力強く実感された

(教育長、校長をはじめとする教職員、そして委員さん達の、思いと心意気が、本気で結びついているということである！ただし、残念ながら、肝心の？教育長さんには、双方ともに、直接はお会いすることはできなかった！お会いしたみなさんの話、そしてS教授からの事前情報からということである！)！

本当に、そういう(町の復活・振興、村の存続?に直結している?)所には、絶対に、そういう人達がいるということである！

そう言えば、今回のI島訪問で、歓迎会?の世話や次の日の見送りに来てくれた、役場職員のY君(R大学の卒業生で、大学で社会教育主事の資格を取得し、縁あって同村の職員となっている!)が、現在の部署の仕事(島の振興策の企画・実施)について、思いの丈を、目を輝かせながら、しばし語ってくれたことを思い出す！

要は、厳しい生活条件、変化する生活環境の中で、「人」や、その交流によって生まれる元気(心意気?)やアイデアが、その存続・発展を大いに左右する町や村、あるいは地域(集落)にあっては、こうした人達は、絶対にいるということであり、彼らの思いと心意気が、必ずや花を咲かせるということである?!

本当は、都市部においてもそうなのであるが、それらは、往々にして、いわゆるビジネス(金儲け?)の対象となり、商業主義や一部の人の利害関係だけで推移することが多い(例えば、かの「キッザニア」の取り組み?)?!

それらの取り組みには、これからの教育・学習のしくみのあり方(学習機会の総合的・効果的マッチング?)を、有意に指し示すものとして、一方では受け止める必要があるようにも思える?!

ただし、そのことについては、ここでは、詳しく述べる余裕はないので、次号で、改めてチャレンジしてみたい?が、今、すべての教育・学習には、そこに伏在している、取り組みの本質的な枠組みを必要としているということである(「ウエルビーイング」とか「リスキリング」とか、新しい衣をまとって再登場してきているが?)！

それが、まさに学校教育と社会教育の包括的な連携システムなのであるが、

それを実現させるのは、他でもない、そこに住む、そして、そこで仕事をする人達の思いと実行力だということである！

(つづく?)